
とある異常な義弟と過負荷な義妹

不純の道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある異常な義弟と過負荷な義妹

【著者名】

ZZマーク

【作者名】 不純の道化

【あらすじ】

この物語は上条当麻に明らかに異常な義弟と明らかに過負荷な義妹がいたらというお話です。時系列的には禁書目録には会つておらず、御坂には会つているところから始まります。処女作です。いろいろありますのが温かく見守つてください。旧とある鬼才の弟と狂つた妹

オリキャラ紹介、独自解釈紹介（前書き）

オリキャラ、独自解釈の紹介です

オリキヤラ紹介、独自解釈解説

オリキヤラ紹介

上条 乱

当麻の義弟で狂の義兄、孤児院で狂と一緒に上条家に拾われた。
年齢は14歳の中学一年生。風紀委員

容姿は安心院なじみを小四ぐらいに小さくしたような感じ。（性格はお世辞でもいいと言えないが）

性格は普段は異常を演じているが、本質的には過負荷とくに球磨川と安心院さんをじつちやにしたような感じ。

能力は『異常』^{アブノーマル}でめだかボックスに出てくる『完成』^{ジョンバ}以外（理由については後述記載）の異常をオンオフ、ハイロウ可能で使用できる。そのためルール有りでの戦いでは負けることはあり得ない（例えばボードゲームでは、行橋の『感受性』と真黒の『解析』^{アナリシス}を使えば負けないと言つた感じ）ルールなしでも負けることはあまりない。

また自分自身が『異常』^{アブノーマル}であるという理屈から能力者であるにもかかわらず魔術が使える。（インテックスの思考を呼んだため10万3000冊の魔道書の知識もある）

上条家とわずかな例外を除いてただひたすらにそして平等に実験台としか思っていない

狂が大好きで（恋愛感情面で）親も一人の結婚を望んでる。（当麻については家族愛程度の感情）

人の事を呼ぶ際は大抵名字で呼ぶ、

親の事は義父さん、義母さん、当麻の事は兄貴、

狂のみ名前で呼ぶ

寝る際は狂と一緒にベッドで寝ている。（そうしないと寝れない）

意外に肉はまったく食べない。

上条 狂

当麻と乱の義妹、孤児院で乱と一緒に上条家に拾われた
年齢は14歳の中学生一年生、ジャッチメント 風紀委員

容姿は可愛らしいがよく似合つ（性格は酷いが）

これまで通つてた学校を例外なく1年内に潰してきた（15校を
廃校にしてきた）それでどこも彼女たちを引きつけなくなり学園都
市に来た。

能力は『過負荷』マイナス でめだかボックスの『過負荷』マイナス 全てをオンオフ、
ハイロウ可能で使える。そのためルール無しでの戦いでは負けるこ
とはあり得ない（理屈抜きで）ルール有りでもあまり負けない。
だがその理由は、あくまで乱が喜ぶからであって、乱が喜ばない限
り絶対に勝たない。

かつては過負荷マイナス らしく相手には『勝つたが負けたような気がする』

とゆう敗北の仕方をしていたが乱に会い能力の間違つたな使い方を
教えられ完膚なきまでに勝てるようになつた。

上条家とわざかな例外を除いてすべての人間をただひたすらにそし
て平等に破壊対象としか見ていない。

乱が大好きで（恋愛感情面で）親もこの一人の結婚を望んでる。（マイナス
当麻は家族愛程度）

人を呼ぶ際は大抵侮辱したような言い方で呼ぶ、
当麻の事は糞兄貴で統括している。

寝る際は乱と一緒にベッドで寝ている（そうしないと不眠症になる）

筑波 玄

風紀委員長、二人の上司でそのつながりで当麻と仲良くなる、

二人とも仕事はちゃんとするので安心している

能力はレベル3の火炎操作^{パイロキネシス}本来はレベル4なのだが能力検査のたび
にスキルアウトたちが抗争を起こすため測れずに入る。（本人はあ
まり気にしていないが）

またハ レンを見て、「マ タン 大 カッケー」とゆう安易な理
由で必要もないのに予備動作で指パツチンをして炎を出す。（発火
布の手袋はネットツーハンで買った）

部下たちからは人格者として知られており、そしてめちゃくちゃ怖
い人とも知られている。

独自設定

『**完成**』^{ジョンド} は 『**過負荷**』^{マイナス} まで完成してしまつため 『**異常**』^{アブノーマル} はもちろん 『**過負荷**』^{マイナス} にも分類されていない

『**幻想殺し**』^{イマジンブレイカー} の正しい力は異能の力を消すのではなく

全てのものに『**終焉**』^{しうえん} を迎えさせる力であるが今は力が弱まつて いるため異能の力のみになつて いる（ちなみに力が元に戻つたらオン オフ可能になり右手から半径30cmが効果範囲である、終焉を向 かわせるのは選択できる）

『**大嘘憑き**』^{オールファクション} は生命体に関しては自分でおこした事象もしくは自分

におきた事象のみ『**無かつた事**』に出来る。非生命体に関してはた いした制限はない。（ガイア理論は成立して いるものとしているた め地球を『**無かつた事**』にはできない）

オリキャラ紹介、独自解釈解説（後書き）

どうでしたか？

今後書きたす事もあります

感想、誤字脱字の報告歓迎します

義兄弟が来た（笑）！――当「（笑）じゃねーよー大問題だよー死活問題だー」

はじめまして、不純の道化です。見ててくれてありがとうございます。
週2～3話ペースで書きたいと思っています。よろしくお願いします。
ちなみに駄文です・・・

義兄弟が来た（笑）……当「（笑）じゃねーよー大問題だよー死活問題だー」

とある高校

SHDEOFF

「不幸だ・・・」

とある少年がつぶやいたが、しかし誰も取り合わない。

「歯わん、理由ぐらいは聞いてください」

この少年の名は上条当麻。不幸な少年であった。

「そんなこと言われてもいいやー」

「そやで、いつもの事やしなー」

上から土御門元晴、青髪ピアスが適当に言った。

「で、どうした？上条？」

「聞いてくれるのは、あなただけですよ吹寄さん（シクシク）」

「そんな事どうでもいいから、どうした？」

「それは」

上条が何か言おうとした時

キーンコーンカーンコーンと授業開始のチャイムが鳴った。

「はーい、今度は先生の化学の時間ですよー」

「…………はーい」「…………」

みんなが元気よく返事をした後、入ってきた小萌先生は上条を見て。

「あと、上条ちゃん今回は流石に同情しますよー」

「ありがとうござります」

普段から不幸な少年にいまさら同情するようなことがあるのかと言つよつやな顔をするクラスメイト達

「何があつたんですか？」

「 言つてなかつたんですかー？ 上条ちゃん？ 上

「はい。」

何が申し訳なあうて言ひ當面

「そりなんですかー。こやですね上条ちやんの義弟ちやんと義妹ちやんがー」（学園都市）に来るんですねー」

—
?

普通はそのよこなごとでは不幸とは言わなかつた
むしに家族と会えるからラッキーと言つた感じだつた。

「この二人はかなりの曲者でここに来るのも前に通つてた学校が廃校になつたからそうですし……」

「 だけど、カミヤンがそれ位で『不幸だ・・・』なんてぼやくはずないんじやないかニヤー？」

ないという、土御門。

「学園都市的には問題なのはこの二人がレベル5だという事なんですよー」

とんでもなく、とんでもないことを言った小萌先生であつた。

そして当然のごとく皆が何かの冗談だと思つたようだつた。たしかに、レベル5はそうそうなれるものではなかつた。

「皆さんは元石というのを知っていますよねー」

「能力開発をしなくても能力があるというあれですか?」
小萌は何かを説明しようとしている間に、口には何かを聞こえた。

「はい。その二人は間違いなく元石なんですよー。しかも義弟ちゃんの方は数学界最大の難問ジユグラー定義などを解いた天才なんですよー」

「嘘だ――――。」「嘘だ――――。」
たしかに嘘だと思つだらう。上条当麻はお世辞でも頭はこゝとな
えなかつたからである。

だが、残念ながら本当の事であった。

「ホントですよー、ちなみに二人の能力と順位は義弟ちゃんの方が、第八位『異常』アブノーマル 義妹ちゃんの方が第九位『過負荷』マイナスですー」

能力名からは、何が何だか分からぬような名前であった。そしてそれが限りなく正しかつた。

「では、受業を始めます」

卷之三

そして、ちやーかり授業を始める小萌であーた。

そんなこんなで学校が終わり・・・

ג נוּאָר

学校が終わり、すぐに帰ろうとする当麻。

「カミヤンどうしたんだ」ヤー？」

「ん？ああ一人を迎えて行くんだ、早くしないとどんな被害があるかわからないしな・・・」

「後半物騒になってるにやー」

土御門と当麻が何かを話している内に、周りには人だかりができる

いた。

「まあ、早く行くわ、じゃあな」

「まで（ガシツ！）！」

そう当麻が言うと土御門が腕を握り。

「何だ？」

何か嫌そうな顔をしながら聞く当麻。

「…………俺も（私も）行く！！！」

ああ、やっぱりと言いつつな顔をする当麻であった。

そして

「はあ、不幸だ・・・」

そう、彼は今不幸だつた。

「人に会うなり『不幸だ』とは何よ！――！」

破壊衝動しかない、糞坂糞琴は冗談で、御坂美琴がそこにいた。

「今、お前にかまつてゐる暇無いんだ。あとにしてくれ

「いっぱいがまつてゐる人いるじゃない！――！」

「「これは勝手につけてきてるんだ……」
セツヒツの言ひ合つてゐる一人であつた。

そして

「何でつこしてきてるんだよ……」

「悪い?」

糞琴は・・・糞琴は自分が正しごと悪いよつた顔して
いた。

「悪かないですけど・・・」

セツヒツが、とこつよつた顔をしながら答へる当麻

「じゃあいいでしょ?それよつ
いやな予感を、感じながら聞く、当麻。

「その用事とかが終わつたらわたしとしょ「つぶしなさ」
戦闘狂かよ。と言ひよつな」とを言ひぬ」・・・糞琴

「義弟か義妹かと戦え」

「どうしてよ?」

めんぢくをセツヒツに答へる、当麻に納得がいかなことこつよつた顔を
する糞琴。

「カミヤンの義弟と義妹はレベル5なんだ」ヤー、しかも元石だぜ
い」

「はあ!?そんなわけ・・・(チラシ)

「「」」ら辺にいるはずなんだが・・・

そう言いながら、あたりを見回す当麻。

「だーかーらー。私は悪く無いって言つてるでしょーー。」

「嘘おつしやいまし、ではあなたの持つてるその凶器はなんですかーー!?」

「ん? と詰つよつて顔をしながら、言つて争つてこねじりを覗く当麻。

「あ、いたいた、おーい狂こつちだー」

そう言いながら、大声で叫ぶ当麻。

「ん? あ、糞兄貴遅い! ! !」

「最初からそれかよ・・・それより乱は?」

そこにいたのは、可愛らしことにうよつな言葉がよく似合つよつな、容姿の少女がいた。

「セレニィるじやん」

「・・・ひどい」

と言ひながら、現れたのは、黒髪、黒眼の少女のよつな容姿をした男の子が立つていた。

だが、なぜか白衣を着こんでいたりと謎の姿をしていた。

「あ、悪いでも『ミスター・アンノウン 知られざる英雄』使ってなかつたか?」

しかし当麻は謎の能力名を言つて、乱とつ少年に聞いていた。

「 」

（どうこつ）とだ? 気配すらなかつたぞ? ）

土御門だけが違つよつて反応をしていたが、他は全員がびつくつしていった。

「うん使つてた」

乱の言葉に、気が付けるわけないだろやつやと聞こながら頭をかぐ当
麻。

「待つてくださいまし、あなたは一人の兄なんですか？」

「ああ、そうだが？ 何か？」

当麻を呼びとめる黒子、それになぜかいややつな顔をする当麻。

「ちょっと、来てくださいまし」

そして、やつぱりか。と言つよつた顔をしながらこじりこじりす
る当麻だが

「どうしたのよ、黒子？」

「いえ、お姉さまたいしたことでは……」

それを呼びとめる糞」^{ハリ}

「なにかあつたのね」

「……解りました、皆様、来てくださいまし」

そして、みんながそろそろとつていていく。

それが、間違いだとも気がつかず」・・・

そして連れて行かれたところにあつたのは・・・

「ねえ、何もしてないでしょ？」

「そうだよ、まったく」

「…………」

みんなが、その光景に絶句していた。

「なあ、狂？乱？」

「「なに？」」

何と聞き返す一人に、当麻は頭を抱えながら言つた。

「人が壁とかに巨大螺子で体に刺さりながら張り付けられてるのが何でもないわけないぞ？」

そう、そこにあつた光景とは惨殺光景であつた。

「どうして？私はただナンパされていらついたから、そこら辺の通行人A B Cで憂さを晴らしただけだよ？そもそも外傷なんてないじやん」

わけのわからない事を言つ、狂に黒子は、

「嘘おつしゃいまし！……これの……ど……」「……が……？」

「……は？え？どうなつてゐる？……皆治つてゐる？」

今かれらは驚愕してゐる。それもそのはず、さつきまであつた事実が『無かつた』事になつていたからであつた。

「まあ、これが義妹の能力の一端だ、これが本質だとは間違つても思うなよ？」

「「これから関わるな！……とは言つても、一度とかかわりたくはないだらうけどね（笑）」」

みんながキヨトンとしながら、関わるなと言つ一人に頭を抱える当麻。

そして、あからさまにおかしい義兄妹が学園都市にやつてきた。

・・・いや、来てしまった？

義兄弟が来た（笑）！――当「（笑）じゃねーよー大問題だよー死活問題だー！」

読んでくださいありがとうございました、どうでしたか？
やつぱりぐだぐだでしたか？駄文ですがよろしくお願いします！

誤字脱字の報告、感想お待ちしております！――！

9/23大幅修正

作者はアンチ美琴（前書き）

HAHAHA、やつぱり評価されて無かつたか、わかつてはいたが
少し悲しいい・・
では本文です

とある繁華街

当麻SHIDE

「じゃあねー、どこに行けばいいの？糞兄貴？」
狂は何でいちいち糞をつけるんだ？

「どうあえず、しばらくなま俺と一緒に暮らしてもいいつ
母さんから言われてるんだよ・・・

「えー、やだー」
「なんだよー一人ともあからさまにやそつな顔してー..
いやほんと傷ついたわ

「どうあえず、これは母さんに言われた『待ちなさいーーー』た・
事？」
なんだ？ビロビロの奴？

「あんた達、私と戦いなさいーーー」
戦闘狂力よーいつはーーーわしきのあれを見て戦いなさいーふざけ
てる、こひねどうあえず・・・

「ビロビロ、お前精神病院行つた方がいいぞ」
「私には御坂美琴つていうちゃんとした名前があるんだーーーそ
れにどこもおかしくないわーーー」
いや確實におかしいだろ

「そもそも、誰と闘いたいの?えーと・・・自意識過剰ちゃん(笑)

「お~おい、あながち間違いでもないけどな

「『じつしきそつなる――!戦いたいのはあんた達一人のじつしかよ――!』

あーあ、やけやつた

「じゃあ、私でいいよね?」

よつにも寄つて狂か・・・『じつじつ死ぬなよ

「いいは、じやあ場所を変えましょ!』『じゃあ被害が出るは

駄目だ』『こつ確実におられる

「なあ、ジャッチメント風紀委員』の戦いは大田に見てくれないか?」

そう大田に見てくれないとやばい事が起きる

「田井黒子ですの、まあいいでしょ!周りに被害が出ないのであれば・・・」

『こつなかなか優秀だな、まあさつきの惨事を見て』『で止めたら』『じじじやり始めるとも思つてゐんだらうなぞな

・・・大当たりだ

「じゃあ、場所は・・・」

『じじにするつもりだ?』

「お姉様、場所でしたらジャッチメントの練習場をお使いください、レベル5同士の対決ならばあからうも快く貸してくださいわねはあ」

「じゃあやつするわ」

ホント白井は優秀なんだなおそらくこれも万が一に備えて何だろ？
が・・・

「じゃあ、日時は？私は今からでもいいわよ？」
本気で大丈夫なんだろ？が、タイムセールに間に合わなくなるから
やめてほしい

「そう、じゃあ今からでも大丈夫？黒子？」

大丈夫なわけないだろ

黒「大丈夫ですの、今さつき使用許可をもらいましたの」
はやつ！ホントに優秀なんだな・・・

美琴 SIDE

たしかにあの一人は異質だけど決して勝てない相手ではないと思う
は、さつきのはおそらく幻覚系だといえば合点がいくし、それなら
いくらか対策がないわけではないしそうしたら勝てない敵ではない
は、そう言つてけば十分に勝てる！――

え？どうなつてるの？私死ぬの？

いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ

まだ死にたくない

「どうしたの？自意識過剰ちゃん わたしの威勢はどうしたの？」

死神が何か聞いてきた

「ねえ、自意識過剰ちゃんもしかして勝てると思つてたの？ルールでの勝利条件である腕章じしやうを奪い取れるとでも思つてたの？順位が上だから勝てるとも思つてたの？レベル5が貴重だから殺されないと思つてたの？まさか私が可愛らしいから？」

何を言つてゐるの？もつこやだ早くこの腕章を奪つてよ……お願いだからわ

「まさか、自分は死なないとサンタさんみたいな事思つてたの？」

「なに？」の螺子？私に突き刺せつてゐる？え？え？え？ほんとに死ぬの？

「甘えよ。」

SHIDE OFF

ガツ 美琴の頭に螺子が刺さった右螺子込み貫いた

「この腕章もらつてくれ、あ、あと」

何の悪びれもなく腕章を美琴から奪つていく狂。そして何かを言い残したように「うつ血つた

「……が、」「その甘さ、」「嫌いじゃないぜ（ビシッ…」なぜか良い台詞せりふを言つた狂は指を鳴らし理解できない否理解したく

ない現象を起こした

嘘のよつこ先ほどまであつたはずの美琴の傷が治つてゐる

否

『無かつた事』になつていた

作者はアンチ美琴（後書き）

“ひつでしたか？やつぱり駄文でしたか？評価お願いします
美琴に何があつたかは次の話で詳しく書きます
最後に・・・美琴死ね

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

園ごの行へ末（前書き）

評価がついている………せつた………ありがとうございます………
ではまえの話で血意識過剰（笑）ひやんに何があつたか書きまく

闘いの行へ末

当麻SIDE

「どうして帰らなきやいけなんだ」「ヤー？」

「そやで、レベル5同士の戦いをみすゞかな、あかんのや？」「危険だからだよ、今こいつらに帰つてもひつひつ説得している

「危険なんだよ」

「んなもん重々承知や……！」

「さつきの地獄絵図がもう一回見たいのか？」

いや、体験してみたいのかだなこれは……

「……すみませんでした！今すぐ帰ります……」「……やつと帰つた、これである程度は被害が減つたか……な？」

「あの者たちを帰らせていただきありがとうござります」

黒子はそつけなく感謝の気持ちを言つが内心としてもホッとしている
よつこにも見えた

「いいや、誰も友達を再起不能にはしたくないだろ」「いや、比喩でも何でもなくホントに再起不能になるかもしないんだよ……

闘いがもつすべ始まるな……でも

「なあ、白井？」

「なんですか？」

「風紀委員多くないか？」
「ジャッチメント

「ざつと見ただけで80人はくだらないぞ

「まあ、レベル5同士の対決ともあればこれぐらいの人が集まつてもしかならないですの」

「風紀委員はそんなに暇なのか？」
「ジャッチメント

「非番の人や仕事の終わった人が大半ですの、それに警備員もいますの」
「アンチスキル

「そう言わればいるな、ちなみにこの戦いはビデオに撮つてるそうだ

「あ、始まりましたの」

「そうみたいだな」

SHDEOFF

最初は五分五分いや、少し美琴が押していると言つた感じだった、事態が急変したのは、今まで美琴が狂におわしていたはずの傷が服を含め全て直つた否『無かつた』事になつてからだ

「ん? どうしたの? 自意識過剰ちゃん? これはさつき見てたはずだよ?」

「どうなつてるのよ! それは幻覚じゃなかつたの! ?」

本気で戸惑う狂に対して美琴は動搖していたが今起きた現象は誰も理解できないものであつた。

そして当然、これには観客（風紀委員や警備員）も驚いていた
「ジャッチメント アンチスキル

「幻覚? 違つよ、これは因果律に関係なく全てを『一虚構（無かつ

た事）』にするそれが、『大嘘憑き』だよ」
信じられるわけがない、そんなふざけた能力誰が信じるだらうか？
だが狂の真の能力はそんな物の比では無かつた。

「くつ……」

美琴は抵抗するため、反撃するため、何よりそこにある現実^{リアル}を否定するため電撃を飛ばしたが・・・

「なつ！？電撃が曲がった！？もう一回……」

しかし、またも曲がつた

「どういう事！？演算は完璧なはず！…なのにどうして！？」

「そう君の演算は完璧さ、まわりが普通ならね」

自分の演算が完璧であることを主張する美琴に対しても狂は意味深そうな事を言った

「どういうこと？」

美琴は乗つてはいけない、言つてはいけないそんな言葉がよく似合う事を言つてしまつた

「息苦しくない」？これは『荒廃した腐花』^{ラフラフレシア}で周りの空気を腐敗させて、私の息苦しさは『不慮の事故』^{エンカウンタ}であなたに押し付けたんだよ
さらりととんでもない事を言つ狂であつたが

「無茶苦茶よ！…そもそも能力は一人につき一つまでつていう原則があるはずよ！…！」

そう、人間の脳では『多重能力』^{デュアルスキル}は不可能だ・・・

「？誰がこの能力が別物つて言ったの？これは『過負荷』を細かく分別しているだけだよ」

「～～～つ！！！？」

驚愕する御坂だが別だん驚く事ではなかつた。
これは狂の能力『過負荷』^{マイナス}の細かな区別わけした名前だ、
解りやすく言えば美琴の『超電磁砲』^{レベルガン}の中にも磁力を操る、電気を作り、などの大まかな区別をさらに細かくしたようなものだ・・・

そして

「どうしたの？自意識過剰ちゃん　さっきまでの威勢はどうしたの？」

あれ以来、狂のワンサイドゲームだつた

美琴はもう狼狽し、観客も目をそらしているものや止めようとするもが大半でもう静かに見ている者などいなかつた・・・

「ねえ、自意識過剰ちゃんもしかして勝てると思つてたの？ルールの勝利条件であるこれ（腕章）を奪い取れるとでも思つてたの？順位が上だから勝てるとでも思つてたの？レベル5が貴重だから殺されないと思つてたの？まさか私が可愛らしいから？」

狂はもう聞く余力をえない美琴に巨大螺子を投げ美琴の体に螺子込んだ

観客は目をそらし中にはショックで氣絶する者までいた

「まさか、自分は死なないとかサンタさんみたいな事思つてたの？」

言葉と同時に巨大螺子を取り出し

「甘えよ。」

美琴の頭に

螺子を

足で

螺子込んだ。

観客は悲鳴を上げ氣絶するものが増えた、
しかし

闘いを止めるものはいなかつた

否

闘っているところに入れなかつた

「」の腕章はもうつてくれ。あ、あと

狂は悪びれもなく腕章を取り勝利した後何かを言い残したように

狂「・・・が」「その甘さ」「嫌いじゃあないぜ」

いい台詞セリフを言つて立ち去つて行つた

しかし、観客はほかの事に目を奪われていた。
美琴の傷が嘘のように治つていた・・・

少なくとも観客にはそう見えていた

闇いの行へ末（後書き）

闇いのぜんぼうが解りましたか？美琴ファンの皆さんすみません。
球磨川ファンの皆さん『』じゃなくてすみません。
そして読んでくれた皆さんありがとうございます。
評価してくれるとうれしいです

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

は？風紀委員（ジャッジメント）に入れ？（前書き）

総合評価「ケタ突入！……皆さんありがとうございます！」
お気に入り登録5件！……これからもがんばります！……

では本編どうぞ！

は？風紀委員（ジャッチメント）に入れ？

乱SIDE

「~~~~~」

今狂はとても機嫌がいい、俺もつれしくなつてくれる

「おい、待てよ」

なんだ？ここいつらは？

「ん？なに？」

「さつきの闘いあまりにもひどすぎるだひー。」「やうだ、そうだ

「何を言つてゐんだ？」ここいつらは、見たところ腕章付けてるし風紀委員か？

「なにを言つてゐのかな？私はルール違反なんかしていないよ？」

「しらばくれるなールールなんかよりあれば仁義に反するだひー。」

なんだ、こいつら、ただの一面しか見れないバカどもか・・・

「どうして？あの子も私にレールガンぶつ飛ばしてきたじやない

「つーだが」

言い返そうとしても無駄だこいついう事に關しては狂は驚くほど頭が働く

「『だが、お前には『不慮の事故』があるだひ』とでも言いたいの？」

「やうだ！それに『大嘘憑き』もあるじやないか！」

・・・こんなバカどもに、治安が守れるのか？

「でもあの時点では、それは憶測でしか無かつたよね？誰が『不慮の事故』が全ての攻撃を押しつけられると言つた？」

111

「誰が『大嘘憑き』が死をも無かつた事に出来ると言つた?」
オールファイクション

そう、あの時点では全ては憶測にすぎなかつた

「そもそもあの子から勝負を吹っかけてきたんだよ？そして“直す”必要もないのに私は“直し”てあげた、感謝こそそれ憎まれる事はしていないよ」

「ぐつ！？だが

こいつらの言いたい事が解らないもでもないが、明らかに今は狂が正しい

「まあ、私は優しいから」「めんなさい」と言えば許してあげなくもな

疑問形かよ

「・・・」J むんなさい

こいつ、根はあまり悪い奴じやなさそだな、そもそもこいつだけ
狂に文句言つてたし

「なに」を言つてゐるんですか！？悪いのね

「だまれ！今は明らかにこつちが悪いんだ、いろいろすまなかつた・
・突然で悪いとは思うが風紀委員に入らないか？」

は？

何を言つてゐるんだ」こいつは？

「なにを言つてゐるんですかー？」んな

「一人ともレベル5だ、こいつらがいれば・・・いや、いるだけで学園都市の治安はかなり改善されるはずだ！－！」
ドヤ顔で言われても・・・

「え～っと、正氣？」

そりやそりや、俺らを仲間にしようなんて正氣の沙汰じゃない

「はつきり言つて正氣じゃないかもしねない」

認めちやつたよこいつ

「だが、お前らが戦力になるのは解りきつてゐーああ、俺の名前を
言い忘れてたな、俺は風紀委員長、筑波 玄だよろしく」

偉い人だつたー！－！いや俺も社会的地位はそれなりに高いけどさー

「・・・仕事多い？」

「いや、お前らは風紀委員ジャッジメンツに所属してゐるだけでいい、それから事務仕事が大半だ、現場には何が何でも、いかせん！」

「じゃあ、いいよ」

すんなり入るんだな、じゃあ俺も

「俺もそれなういい」

「本當かー！あらがとうー！本来は試験とかがあるんだがまあいいか
いいのかー？まあ楽でいいけどさー

「いや、さっきの事はホントにすまなかつた、頭に血が上つてたんだろうな・・・」

ホントにこいつ、いい奴だな

「いや、いいよ、よくあるしね」

「えつと、あの・・・」

ん？ああ忘れてたその他大勢の奴ら

「あ、『めんね影薄いから、忘れてたよその他大勢の皆』
「ははは、じゃあ明日から頼むな！えーっと？」
なんか爽快な笑顔がうざい」

「私は上条 狂」
「俺は上条 亂」

「「一人合わせて狂乱だから」」

うん、拾われたときに一分もかけて考えた決め台詞だ

「ん？上条 亂？もしかして、ジュグラーの定理を解いた・・・」

「そうだが、それが？」

「いや・・・びっくりしてな・・・」

そりや、そうか、ちなみに俺はここには学生としてそして研究者として招かれてる事を言うとさらに驚かれた

「おーい、乱、狂、帰るぞー」

「狂乱だつづつてんだろーが！・・・」「

「『めんごめん、じゃあ帰るぞ』」

まあ、少しだけ風紀委員になつた俺たちであった

当麻SHIDE

「はー?」

「何回も言わせるな、糞兄貴、ジャッチメント風紀委員に入つたえつと、ここつらが、..

「しかも、風紀委員長の推薦で、ジャッチメント大丈夫か!? 風紀委員長!」

「これにハンコとか押して、

紙にハンコをおせと催促する狂だが

「えつと、お前らホントに入るのか?」

「ああ、仕事は事務だけだから心配するな」

ああ、ならいいや。乱はこうこうのでは嘘はつかないし

「ほい」と

これでこの二人が少し常識がつくといこなと思つてゐ

「じゃあ、早く寝ろよ、明日転入式なんだろ?」

レベル5しかもそのうち一人がとんでもない天才とあらばこれぐらい当たり前になつてきた・・・

「俺は『アリバイプロック脇罪証明』を使えばいいんだが」

「さうか、じゃあ狂と一緒に登校しなくてもいいだな」

「早く寝よつ」

ちゅうこ、ひめこ、ん？

「なにベッド使つてんだー？」

「寝るからに決まってんじゃん

なに聞こてるんだって顔でじつ見るんじゃねえよー？

「俺はー？俺はどーで寝るんだー？」

「洗面所で寝れば？」

「酷いっーーーこれくらい普通だろ的に言われたしーーー

そんなこんなで洗面所で寝る羽田になつた私こと上条当麻があつた

は？風紀委員（ジャッジメント）に入れ？（後書き）

見てくださいってありがとうございました
いやー、思いつきで書いてたらこうなった。

ああ、次からどうしよ・・・

誤字脱字の報告、感想お待けしておつります（評価もして貰いたい）
！（おねだり）

乱先生の武器講座（前書き）

今回は乱の武器解説です

乱先生の武器講座

武器

『スーパーボール
超弾道弾』

凄まじい反発力をもつたスーパー・ボールだ、
鉄板（5ミリ）なら貫通するぞ
定価80万（1個）

『ショーティレーラ
炸裂爆弾 灰かぶり』

まあ、その名のとうり炸裂爆弾だ、
核シェルターとまではいかなくとも大抵の壁は粉碎できる
定価5000円（1個）

『巨大螺子』

狂の使つてる螺子だ、

親からもらつたおこづかいで買つてるぞ（月4000円）

定価2000円（1個）

『ロケット花火』

独自の爆薬を使つてるぞ（国の規定をはるかに上回る）

先に鉄製のとげがあり当たるとかなり痛い（とゆうか突き刺さる）
まつすぐに飛び対象に当たると爆破する（当たり所が悪ければ死ぬ）

定価3000円

薬品

『ノーマライズ・リキッド』

体の構造を強制的に普通に戻す特効薬だ

能力開発をしたものにしか効かないためモルモットでの実験ができ
ずにいた
副作用として体中に激痛が走る。

乱先生の武器講座（後書き）

これからも次々更新していきます。

10/10日 薬品追加

転入式（前書き）

ここにちは復活しました
では本編どうぞ

転入式

狂SIDE

今私達は転入式を行つてゐる、

乱が今から何か言つ（毎回転入するたび発表している）
お、始まつた

「喜べ実験台ども、明日から俺が時間割を組んでやる」 ザワザワ
「ふざけるな！俺らが実験台どもだと！？俺らは生徒だ！お前がど
んなに偉かろうが人権の侵害だぞ！…！」
何か騒いでるな

「なにを言つてる？お前らは基本的に学園都市で能力開発という実
験に加担している実験台じゃないか。それを俺はさらに効率化して
やると言つてるんだ。ありがたく思え」

・・・いつもどつりの事言つてるね、でもあんな事どうして顔色一
つ変えずに言えるんだろ？

それから結構ざわついてるね（いつも事だけど）

おつと、乱が言い終わったみたい次は私だな。

SIDE OUT

乱SIDE

言い終わった、毎回毎回どうして実験台どもは、ああも騒ぐんだか、
次は狂か、・・・俺は毎回発表しているが狂は今回が初めてじゃな

いか？

どんな騒動つんだろ、楽しみだ。
お、始まつた

「えー」「モブキャラのみなさん」^{モブキャラ}。

「ジッとした個性なきみなさん！」「
ベギッ！…今度はこんなおとかな？

「怪我はありませんかその他大勢のみなさん…」「
ゴスツッ！…」

「なんだ」の効果音は…?何となくで「」つなつたぞ…?

「気分が悪いのなら早く帰つた方がいいですよもつ田番のないみな
さん…」「
ドサツ…」

結構の実験台が倒れたぞ…これじゃあ研究が…

「もうやめてくれないかな？狂君？」「

言われてもいい、校長までふらふらになつてゐるよ…

いやでも、小等部から高等部まであるこの学校上記学園のほとんど
の生徒（3人ほどたつてゐる）を言葉だけではつかむことは…
凄いな…

とある教室

「ねえ、あの転校生このクラスの来るんだって！」

「アーティストのアート」

自信名下げに告げる生徒であつたが、狂の方はどう考へても危険ではある

「いやや、そうでもまずくね？」

この生徒達はさつきの発表での二人の異常さを知つてしまつていた
否、知つてゐると思い込んでいたのだ

「だからさ、懲らしめない？」

きりと聞こえる声だった

「え？ ・・・ そうだね ・・・ 「

「そうしようせ」あいつがいくらレベル5でも俺らがまとまればどうにかなるだろ?」(そうだね) やうひせ(ガヤガヤ)

ここで行われているのは言わなくとも解るだろうが、いじめの相談

彼らの中にはレベル4もあり勝てると思つのも自然な流れだった。
そしていじめが決行された。

内容的には座る予定の机などに落書きなどをするものである

誤算があるとすれば、それは

乱の異常性否過負荷性を甘く見ていた事だらう

SIDE OUT

とある新任教師SIDE

今日から転入してきた生徒（しかもレベル5）を受け持つことになりました！

私なんかで大丈夫かな？

あ、そんなこと考えていたら教室についてしまいました、何かあつたらその時はその時でいいですよね？

まずはいつもどうり

「みんなー出席と・・る・・よ?」
え?どうなつてるの?

SIDE OUT

SIDE OFF

新任教師が入ってきて見た光景は、
血だらけになつていてる生徒達とその中で落書きのされた机に座つて
漫画を読んでる狂の姿だった。

「あ、先生遅ーい、待ちくたびれたよ」
狂はこの情景の中あまりにも普通に教師に話しかけた

「まったく、狂は特別に研究をするための部屋をもらつてそこでわ

けのわからない事言つてゐるし、クラスに来てみれば机は「れだし」教師を無視して勝手に何かを愚痴る狂であつた

「あの・・・これはどうして・・・このクラスの生徒たちはどうしてこうなつてゐるの?」

か細い今にも消えそうな声で教師は狂に問いかけた。

「え? そんな私の能力の一端である『致死兵器』^{スカーティッシュ}でやつたに決まつてんじやん」

当たり前と言わんばかりにちらつと狂は自分がやつたと言つた。

「どうして! どうしてこんなことやつたの! ?」

教師は驚き怒鳴つてしまつたがこの行為を誰が否定できるよ。否、少なくともここにいた

「あの机見たでしょ? いじめられたからだよ」

そう狂が・・・

「それでも、それでもやりすぎですよ! ! !」

しかしひるみながらも十人中十人が賛同するセリフを言つた

「おいおい、私はいじめられたんだぜ。しかもクラスメイト全員にだぜ。どっちの方がやりすぎかな?」

しかしそういう枠には自分は入らないそう自覚している狂にはあまりにも無力な言葉だつた

「つー? でも、暴行はいけません! ! !」

「私は精神的に暴行を受けたんだぜ、差別するなよ」
平然と自分は被害者だと主張する狂に対し教師は

「つーし、しかし・・・」

何も言えなくなり、その場に立ち尽くし狂は

「何か言葉が見つかたら教えてね、その間漫画でも読んでるから」
平然と教師の今考えていることを漫画を見ながら待つと言った。

ちなみに一時間ほどたつてこの光景を見あきた狂の気まぐれによつて外傷を無かつた事にして驚いてる新任教師を見て笑つたり、まだ倒れているクラスメイトを見て笑つたりしていた。

ちなみにこのクラスの授業がかなり遅れたそつな

転入式（後書き）

どうでしたか？やはりわけがわからなかつたですか？
感想お持ちしております

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

七月十九日（前書き）

はい、投稿します、

総合評価が上がつてうれしいです！！

ちなみに美琴による電化製品が駄目になるといつイベントはあります
せん

理由は本文で

七月十九日

当麻SIDE

狂と乱は長点上記学園に入学した、それは必然的に“長点上記学園の寮”に入るはずだった、

そうだったんだ、母さんが、あの一人を知り合いまいところに入れるなんてかわいそうとかいつて、運良く（俺にとつては運悪く）俺の住んでる部屋の隣が開いていて、今そこに一人は寝泊まりしている。

ホントに帰つて荷物置いて寝る以外に使わなく飯なんかはここで食つている

今日は夏休み前日、

大抵の学校は午前中授業だけで済み大抵の学生はそのあと外で遊ぶ、俺も狂と乱と一緒にファミレスに行くことになった。

今、俺はステーキセットを待つていた。

「ちょっとお手洗いいくね」

毎回思うが狂は変なところで綺麗な言葉で言つんだろう？

「ん、解つた」

乱は炭酸飲料を飲みながら答えた。とゆうかこいつ炭酸飲めたんだ。

・

「解つた、早く行つて来いよ」

「お前に言つてねーよ糞兄貴」

本気そんな言葉で言われたけど、いつもの事だ、いつもで済ましてる俺が悲しくなってきた

「ねえセシの彼女～」

「俺らと遊ばないかい」

ん?ナンパか?いやでも、わざわざしての……ゾクツ……

「殺すなよ、乱?」

「解つて、死などには逃がさない」

本気、さつきの狂の言葉とは比べ物にならない。しかも田が暗くなつてゐる

「俺が何とか言つてやめておいたが、な?」

「……解つた」

ほ、よかつた、ではまず

「遅かつたじゃないか狂、乱が待つてるぞ」

「なんだテメ?」

あからさまにうつとうつうに聞いてくるがお前たちのためなんだぞ

「そいつの義兄です」

「乱は?糞兄貴」

俺への感謝はないのか。まあ当たり前か……

「あつちで待つてる」

「お~お~、兄ちゃん人のナンパを邪魔するのか?」

邪魔する気はないが助ける気はある

「お前らがナンパしているのはレベル5だぞ?」

「な~だが子供だぞ?」

子供は以外に危ないんだぜ?とゆづか乱はれてなよ絶対に

「せつ 爾義弟の方が殺氣ついていた、だからやめとけやつじやないと」
「やつじやないと？」

「」からともなく、『日本刀』が飛んできた。

「これに当たるかもしれない」

「すみませんでした！……俺らが調子乗つていました……」

全力疾走で逃げていつたけど代金はらわずに逃げていつたぞ

「氣をつけてかえれよー」

そんなこんなで今俺らは注文した料理を食つていて
ふつ、うまこうまこフリーズドライでもこんなにうまいんだな

「なにうまい食つていて、しょせんフリーズドライじやないか」

「気持ちの問題だよ」

サラダしか食べない奴に言われてもな

「私は乱と一緒に食べるものなら何でもうまいこと」

そんなこんなで帰つてると

「お、白井どうしたんだ？」

「つー第九位」

苦々しげに狂をこらんだ

「なに？あなたも私を逆恨みするたち？」

逆恨みか・・・

たしかにこれは逆恨みだな・・・

「いえ、先ほどの『無礼は許してください、何せお姉さまが入院することになったのですから』

は
?

・
・
・
・

七月十九日（後書き）

短い！！！予想以上に短い！！！

明日詳しく書きます！

許してください、

お願いします

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

七八一「十日禁書田録編その一（前書モ）

昨日投稿できませんでした、すみません。
では本編です

当麻SIDE

とある学生寮

「はあ」

白井から聞いた話によるどビロビリは死に直面しその時の光景を何度も思い出しては能力を暴走させているそうだ。

今は精神科に入院していて傾向はいたつて良好なのだが・・・

「方法が投薬による記憶制御か・・・」

それしか方法がないのは解っているが・・・

「ビロビリの性格上もう一回狂や乱に勝負を挑みそうだな・・・」
そう、どれほど記憶を消したが解らないが少なくとも狂に惨敗した事は覚えていないだろう。

「ああ、もうやめだやめ！ そう今日から夏休みだ成績も赤点じゃないし夏休みを満喫できる！ 宿題で解らないとこがあつたら乱に聞けばいいあいつの教え方は上手いし、そもそもあいつが高校生程度の問題が解らないわけがない！」

なんか自分で言つて悲しくなってきた、弟を頼りにするなんて・・・

その日の朝

プルル、プルル

ん?なんだ?携帯が鳴っている?

「はい、もしもし」

「上条ちゃん。出席日数が足りないから補修でーす
・・・

は?え?」の声は小萌先生?

「どういふことですか?」

「どうもこうも上条ちゃん不幸に不幸が重なつて学校に来ない日が
多かつたじゃないですか?」

そう言わればそんな気が・・・

「解りました・・・何時からですか?」

「一時間後ぐらいからです、よつは、八時からです」

「あのー、あなたは朝の六時に入携帯に電話をかけたのですか?」
「そうでもしないと上条ちゃんの事だから不幸が重なつて遅れて来
ますし、もしかしたら来ないかもしれないじゃないじゃないですか?」
う、否定できない

「解りました行きますよ」

「解りましたー、じゃありますねー」ブツ、ツーツー

投げやりだな・・・てかあの先生は朝の六時に出勤しているのか!?
でも、やっぱり

「不幸だー!ー!ー!」

「「うつせー!ー!ー!」

狂と乱には解らぬーよこの気持ちは!ー!ー!

「今頃上条ちゃんは『不幸だ――』とか言つてゐるんでしょうね」

SIDEOUT

SIDEOFF

「なあ、乱?」

「なに?」

「朝ごはんを作る手伝いしてくれないか?」

「朝から野菜のフルコースが食べてもいいならいいが」

「すみませんでした」

朝の一連のやり取りをした義兄弟だった

それから數十分後

「できたぞー、今運ぶからなー」

朝ごはんは食パンが各二枚づつとヨーグルトあとは飲み物と簡素なものだった

「はーい、落とさないよつに氣をつけよー」

「落としたら『スカーティッシュ致死兵器』で血祭りにあげてやる」

「おとさねーよ」

「ベギッ――そんな音を立て何かを当麻は踏んだ

「ん?なんだ?この音は?」

恐る恐る足元を見た当麻の足元には、

大破したクレジットカードがあった。

本日一回田の不幸だーを言つ当麻に対し狂と乱は

「ぎやはははははははは！――面白い！腹いてえ！ひーひー腹痛い」狂は大笑いし、床を叩きゼーハーゼーハーと呼吸を乱していた

（何で兄貴はあんなに大きい声を出しちゃうのに食器を落とさずに
入れるんだろう？）

話題でもしに事を考へてはいた

そんなこんなで朝一はんを食い終わつた兄妹達は

「つべ、と、とりあえず、天気もいいし布団を干そつ
「ひーひー腹痛い、朝ごはん壮くかも」

な気がする・・・)

「当麻いま」も泣きそうなかを押し、狂は本当にしきそうな顔をしながら吐くといい、乱は今後の予想をしていた

「空は青いのにお先は真っ暗

（桂林）病患者みたいな事言つてゐるな

糞元貴にお先が明るい事なんかあるわけないじゃん」

精神医学に精神達していを苦がると思つかがに猶か言がる事一
れもそうかと考えを明後日の方向に投げ捨てた

「ひるせい、つか夕立とか降らないよな?」

「大丈夫、『樹形図の設計者』でも今日は夕立は降らないって言つてるし、そもそも俺の『天気予報』でも・・・」

「どうした？」

何かを考え始めた乱に当麻はこの先自分が不幸になるのかと思い始めたが

「今度から『天気予報』とかの演算系能力を『ガイアダイアグラム地球の設計者』つて呼ぶことにした」

「・・・（それってただ単に作者が名前を思いつかなかつただけじゃ）」「

さすがにこれには狂でさえ悶絶した

「ま、まあ布団を干そう・・・」

「解つた」

聞かなかつた事にしよう、一人で暗黙の了解をし布団を干そうとし、扉を開けるとそこのは

「？」

そこには白い服を着た銀髪碧眼の女の子がいた

「はあ！？」

「どうした？・・・何こいつ？」

「うわあ、べただー」

「お前らはどうしてそう平然と居られるんだ！？」

たしかに平然でいられるわけがない光景であった

「お

「乱何か言つたら翻訳してくれ」

「解つた」

語学力がバカみたいに良い乱に翻訳を頼む兄の姿はあまりにも頼り

ないものに見えたが

「おなかへつた」

「だつてさ」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

シスターは翻訳するまでもなく日本語をしゃべつたのであつた

七月一十日禁書田録編その一（後書き）

はい、皆さんこの人が誰だか分りましたよね？
アンケートらしきものをとります。

内容は乱と狂が使う『アブノーマル異常』と『マイナス過負荷』です。

能力名と効果を書いて教えてください、お願ひします。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月 | 十四禁書田録編その一 (前書き)

学校が早く終わったので投稿できました。
読んでくれてる皆さん本当にありがとうございます。

では本編です。

当麻SIDE

とある学生寮

「おなかへつた」

「だつてさ」

「・・・・・」

俺は（狂も）自分が思つてゐる以上にバカで乱が訳す必要もないと
思つた外国語を空耳アワーよろしく日本語に変えたのだと思つた。

「おなかへつた」

「だとわ」

「・・・・・」

駄目だ、熱がある、そうだ、そうに決まつてゐ、今日はおとなしく
寝よう。

「おなかへつたつていつてるんだよ！？」なに一人とも立ち去りつと
してゐる！？」

「一応言つておぐが、こいつのしゃべつてるのはれつとした・・・
日本語だ」

「でも外国人だぜ！？」

「白人の日本人なんかざらにいる」

「うなづくのか？」

「一応イギリス人なんだけどね」

そんなんのはたいした問題じやないと思つただが・・・

「ナニ? ひょっとして、アナタはこの状況で自分は生き倒れですかおつしゃりやがるつもりでせつ?」

「倒れ死に、とも言ひ?」

「兄貴、日本語こいつより間違つてゐるが」

解つてゐるよ

「何かおなかいっぽい食べさせてくれると嬉しいな」
断つたら悪人の様な気がするな。

「あー、朝ごはんの残りでも食つか?」

「ありがとうございます、そしてビニールあるの?」
食欲旺盛だなこのシスターさんは・・・

「待つてろ、今テーブルに運ぶから」

「わかった」

聞きわけは良かつたか

「まずは自己紹介しなきやね」

「・・・いや、まず何であんなトコに干してあつたのか・・・」

「私の名前はね、インデックステークスって言つんだよ?」

「誰がどうみても偽名じやねーか!」

「うわつ、ネーミングセンスわるつ」

「目次? 目録? どちらにしても変な名前だな」

駄目だこいつら、本当だめだ。こいつのを残念なこつて言つんだ
ろうな

「見ての通り教会の者です、こじ重要。あ、バチカンじゃなくてイ
ギリス清教の方だね」

「意味わかんねーしこつちの質問は無視かよー?」

「チツ!あのいけすかねー化け狐のとこかよ」

「何言つてるの?乱

狂に先に聞かれたが本当に何言つてんだこいつは?

「何もかにも、イギリス清教、最高司教ローラ＝シチュアート、だいぶ前に奴の住処に科学的な防護装置をつけろつて依頼が来てその時に会つた、まったくあいつは本当に化け狐だ、『感受性』を使つたにもかかわらず何を考えてるかが全く解らなかつた、でそんなとこの奴がどうしてここにいるんだ?」

いやあのー、あなたは何時の間にそんなお偉いさんと知り合いになつているのですう?

「きみ、すごいんだね、普通は信者でも会えないのに・・・」

「世の中そんなものぞ」

そつけなく言うがたしかに世の中はそんなものだ

「つーん、じゃあ聞くけどこいら辺にイギリス清教の教会つてある?」

「無い、そもそも日本は十字教でいえばローマ正教が大多数だし、学園都市にはまともな教会そのものがないんだ」

うわーなんか、会話に入るすきが全くないぞこれ・・・
てかもうこんな時間!?やべ!

「補修あるから留守番頼むぞ!?」

「私のクラスも授業が全然進んでないから補修、てか学年全体が補修

おいー仮にも名門校だろ!?大丈夫なのかそれで!?

「俺は風紀委員のなんかで177支部に実地研修。これは筑波でも外せなかつたらしい」

・・・じゃあ、このへンテコスターを家においてけど?

「大丈夫、おなかいっぱい食べたしもつ出てくから」
満足そうな顔で言つているが

「大丈夫なのか?」

「なんなら、風紀委員の支部で預かることぐらいならできるぞ、少なくともあそこにいればお前が逃げてる奴は追つては来れないだろうしな」

・・・
は?

七月一十日禁書田録編その一（後書き）

進まない！思つた以上にすすまない！
たぶん明日も投稿できます。
見てくださつてありがとうございます。
誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七円一十円禁書目録編セリ（複書セ）

「うう、まつたくペン？が進まない、案があつても書く気がなかなか起きない。

てゆづか、七円一十円は何話続くんだ？

そんな感じの七円一十円かの三です。（・・・どんな感じになるんだろう？）

当麻SHIDE

とある学生寮

・・・は?

え? 」のくんテロシスターが追われてる?
何言ってんだ?」の義弟は?

「えーと、その事言ひたけ?」
マジで追われてるの!?

「言ひてないが?」

「こいつは何でそんなこと聞くんだ的に首をかしげてるんだ?」

「じゃあなんでこいつが追われてるなんて解ったんだ?」

「当然俺は聞いた、狂は学校に行く準備をしているけど・・・
だろ?」「十七階だし」

「一田画全じやないか、教会の者がどうしてあんなことに干されて
たのか、それは上から落ちたからに決まってる、妥当なところは屋上
から落ちたことになる・・・だけど

「どうしてそこから、追われてるになるんだ?」

「そんなのこいつがシスターだからに決まってるからじゃないか
は? どうこいつとですか?」

「聖職者は基本的に自殺なんかしない、だとしたらどうしてあそこ
に引っかかっていた？しかも『』、学園都市で？」

うーん、確かに不思議だ・・・

「しかも気絶していたにもかかわらず、見たところ傷一つないそれ
どころかベランダには何かを吐いたを後さえない、例え一階だろう
と落ちれば何かを吐くはずだしその衝撃で気絶するとなるとなおさ
らだ、大方衝撃吸収材でも着こんでいたんだろう」「うううううううううう
頭が痛くなってきた。こいつはどうしても小難しい話をするん
だ？」

「じゃあ、なぜ衝撃吸収材なんか着こんでいたんだ？襲われる事を
想定していたと考えるのが普通だ、いくら学園都市でも銃刀法ぐら
いはあるしな」

「服の中に日本刀やら実弾の入ったマシンガンやらを隠し持つてる奴
が言つても説得力無いぞ

「じゃあなんで気絶してたの？衝撃はなかつたんでしょう？」
「たしかに・・・うおっ！？何時の間にいたんだ狂！？」

「びっくりしたんじゃね？」

「そこいら辺は投げやり！？」

「大方正解かな？たしかに追われてるけど、衝撃吸収材？そんなんの
着こんでないよ？私が無事だったのはこの『歩く教会』のおかげだ
と思う」

「歩く教会？」

「歩く教会？能力の名前か？」

さすがに亂でも知らないのか・・・

「「うん、」これは防護結界」

・・・は? 結界? ああそつか邪氣眼かそれなら全部名得できる

「防護結界? 空力使い(ヒアロマスター)の派生能力かなにかか? そういう見方は俺にはできないよ

「「うん、魔術」

・・・はい邪氣眼けつてーい

「魔術?・・・そつか、あの化け狐の頭にあつた謎の方式はそれか・

・・・

何マジにしてんだ!?」の義弟おとしは!?

「否定しないの?」

「何もかにもを否定していたら発見などあるものか

「え? 魔術? 使えるの!? 見せて!」

何かを考えながら言ひ乱ときょうみ心身に聞く狂を見ていて俺がかしこよくな気がしてくるのは俺だけか?

「えつと、私は魔力はないからできない」

テレビで駄目超能力者を見る感覚だ・・・

「で、その『歩く教会』とやらはどんなものなんだ?」

「これは『教会』として必要最低限な要素だけ詰め込んだ『服の形をした教会』なんだよ。布の織り方、糸の縫い方、刺繡の施し方その他もももろ全てが計算されてるの、その強度は法王級せつたいだよ自信満々に『歩く教会』の自慢をしているが確証す者がないからな、やっぱ手の込んだ遊びでもしてるんじゃないのか? このヘンテコシ

スターは

「えい！！」

「おい！？狂！？何してるんだ！？」

「ナニって、今の説明を確かめるために螺子を投げただけだよ？」

未曾有の少年犯罪になるぞそれ！？

「大丈夫だよ、ほら」

そういう割れていンデックスの方を見てみると、床には狂の投げた巨
大螺子が転がっていた

「ほつ、じゃあさつきの説明は本当だつたんだな。その法王級な強
度については」

「ナニお前らそんなに冷静なんだ！？つてもひつこんな時間…やべ
！？行つてきます！…！」

「あ、ホントだ私も行かないと」

急がないと補修の補修になつてしまつー。

「で、どうする？風紀委員の支部に保護でもしてもらひつか？」

「つうん、私ここには一応不法侵入だからまずいかも」

「そりか、じゃあ、達者でな」

お前本当にジャッチメントなのか？

「うと、君もね。あと最後の言葉、爺くさいかも」

「わざと」

七月一十日禁書田録編その三（後書き）

うわー！最後がものすごくダグダグダだったー！
しかも、魔術のワードは出たのに魔術結社の単語が出ていない！ど
うしょー！

ちなみにインデックスは戻ってきますよ、『歩く教会』の効力も実
は狂がなかつた事にしている設定ですしじやあ、また明後日とか。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月一十日超電磁砲編（前書き）

この間にか総合評価が三ヶタにいったた！
これも皆さんのおかげです！

では本文です。

七月一十日超電磁砲編

S I D E O F F

とある商店街

「へー、今日レベル5の御坂美琴さんに会えるんだー」

「はい！今日念願かなつてあの常盤台中学の御坂美琴さんに会える
んです！」

日をキラキラ輝かせているのは初春 飾利^{チメント}この街の治安を守る風紀^{ジャツ}委員の一人である

「やめときなよ、きつとレベルをかさに人を見下すようなお嬢様に
決まつてるよ」

そしてもう一人いるのが佐天 淚子^コこの街の一般の学生だ。

「いいじゃですか、お嬢様」 プルルル

「電話なつてるよー」

お嬢様の良さを語りうとしたのを逃れられた佐天は内心ホッとして
いた

「あ、はい。もしもし初春です、あ、白井さん、え？もう一人来る
んですか？解りました、ではファミレス前ですね。今すぐ行きます
「なんだつてー」

「え？あ、はい、えーともう一人来る事になつたようです、あ！佐
天さんも行きましようよー」

「え？いいよ私はつ！？」

「じゃあ行きましよう」

「ちょ、人の話を・・・」

とまあ、和やかな話をしているのは初春飾利と佐天涙子で今から御坂美琴ともう一人のレベル5に会つ事になつた哀れな少女たちだった。

とあるファミレス前

「えー、お姉さまこちらが初春飾利、風紀委員ジャッジメントでわたしのバックアップをしてくださるんですの、でこちらが・・・」

白井 黒子が初春の説明をし終わつてもう一人の説明をしようとしたが初対面だつたため言葉をつぐんでしまつた。

「こんにちはー、初春の親友の佐天涙子でーっす。なんか知らないけどついてきちゃ いましたー、ちなみに能力値は0でーす」
それに気がついた佐天涙子は自分で自己紹介を聞かれもしない能力値を言った

「さ、佐天さん」

それに戸惑う初春はゴニョゴニョ何かを言い始めたが結局何を言いたいのか解らないまま

「えーと、初春さんに佐天さん、私は御坂美琴よろしく」

御坂が挨拶をし始めた

「え、あ、はい」

佐天は予想に反してフレンドリーなことに驚きを隠せずにいた

「あ、白井さんもう一人の人はどこにいるんですか?」

「えっと、もうすぐ来ると思いますの」

もう一人来るはずのレベル5をどこかと聞く初春に対し白井はもう

すぐ来ると言つたが

「もう来てるよ」

「……？」

いきなりどこからともなく現れた乱に対して驚く四人に對して乱は
「初めましてかな？俺は上条乱、今日だけで177支部に研修に來
たんだよ本当は狂も来るはずだつたんだけど補修でこれなくなつち
やつた、有する能力は『異常』^{アブノーマル}ちなみにレベルは5、順位は8位だ
よ」

無視して自己紹介をした。

「いつからそこにいたんですの！？」

空間移動系能力者の白井黒子は同じ能力者がテレポートする際わず
かだが予兆とでも言つべきものを感じる事が出来る、だが乱からは
何も感じず本当にいきなり現れたことに驚きを隠せずにいた、そし
たら乱は

「いつからか、その質問に対しての回答はいつでも も『アリバイブロック
アブノーマル』^{アブノーマル}を細かく区別わけした中の一つさ

とあまりにも訳のわからない説明をしたが

「じゃあ、やつぱり空間移動系なの？」

かろうじて物事をつなげる事の出来た美琴がそういつた、今までの
事を踏まえればこう断定してもよかつた、だが乱の説明はそれこそ
統括理事会でさえ予想だにしない説明だつた

「いいや、これはテレポートでもアポートでもないよ、似て非なる
ものや。簡単に説明するところは、いつでも好きな時に好きな場所

にいられるのさ、密室でも、宇宙でも、天国でも、地獄でも、夢の中でも、心の中でも、きみたちの中でもさ」

四人は超能力で説明しようとするとあまり彼の真の能力を、本質を、忘れていた、そう『異常』を・・・

「まあ、それはさておき、どこ行くの？服屋はいやだぜ、荷物持ちもごめんさ」

あまりにも普通に異常なことを言い放った乱に対して四人は

「あ、え、そうですね、多少予定は狂いましたが今日の予定は私がばっちし（ガッソン！）！」

「まったく、そうよね、ここにいても仕方ないしとりあえずゲーセンにいこつか

「そうですね」

「はい、解りました（うつ、何かお嬢様みたいな事をできると思つていたのに）」

異常な方法で普通に戻つて行つた・・・

なんやかんだあつてクレープを食べることになつた一行は

「あの銀行どうして昼間なのにシャッターしまつてるんでしょ？」
ささいな疑問を初春が言い終わつた瞬間に防犯シャッターがバコン
という盛大な音を立て爆破した。

「つ！初春アンチスキルに連絡を！それからけが人の有無の確認、
急いでくださいまし！」

「はい、解りました！」

教本に書いてあるのか迅速に行動をとつた黒子は初春に指示をする

と今度は

「乱さんはそこで待機を・・・つて居ない！？」

乱に指示をしようとしたがもう居なく、乱は現場にいた。

「風紀委員だ、器物破損と強盗の現行犯で捕まる、さつさと、捕まりな」の実験台じもが

誰がどう見ても挑発的な態度で誰がどう聞いても挑発的な事を言つており、案の定と言つべきかどう言つべきか、強盗たちは

「なんなんだ？このガキは？」

「ジャッヂメント風紀委員はそんなに人手不足なのか」

「はは、ちげー、ねえ」

「おい、てめー長幼の理つて知つてか！？」

相談が終わるやいなや殴りにかかるが乱は

「そうか、そうか、抵抗するんだな解つたよ、じゃあ、『ヒザマズ跪ケ』

そう言い放つた、そして強盗1は

「な！？う！」かねえ！？どうなつてんだ！？畜生！？！」

跪いていた

「こいつはな『人身支配』と言われてるが実際には電磁波を発する能力でな、脳に直接命令を出来る事が出来るんだよ、お、そうだそつだ、ついこの間開発したこの『ノーマライズ・リキッド』を貴様で試すとしよう（ニタアアアアア）

液体の入った静脈注射を取り出し強盗1に打つた

「いてえ！いてえよ！誰か助けてくれよおおお！！！」

叫びだし、苦しんだ

「て、てめーあいつに何をした！？」

仲間が急に苦しみだしたことに驚く強盗一

「何をした？こいつを打つただけだが？」

「その薬は何なんだよ！？」

それを見ていたものすべてが思っていた疑問を代弁したかのように元凶が言い放った

「ここの薬は『ノーマライズ・リキッド』と書いてな、体の構造を普通に戻す特効薬さ」

「何を訳の分かんねーことを言つてんだよ！？」

まあ、とてもじゃないが強盗に走るような奴が解る話では無かつた

「最後まで聞けこの実験台が、まあここの学園都市では脳の開発をしているだろう、その脳の作りを強制的に、一気に開発したらどうなる？分散してるからいいものも一気にやつたら激痛が走るに決まっているだろう、逆もまたしかりだ。まだ抵抗するか？こっちにはまだ実験していない、いや、能力開発を受けた者にしか効かないからな、モルモットでの実験のしようがないんだ、お前らで実験でもしようか、捕まるならやめんでもないぞ（ニタアアアア）

悪魔の微笑みを浮かべながら言つ乱に怖気づいた強盗は抵抗もせずに捕まつた

「凄いです！やつぱり本部の風紀委員は格が違います！」

ジャッチメント

初春は最大限の称賛をしたのに対して白井は

「しかし、まあみんな脅しに屈したものではまえの事もあつてがあまり称賛できずにいたが

「齧し？何の事だ？やつを言つたのは全部本当の事だぞ」

「何を言つてるんですのー？あんなもの作れるはずありませんのー？」

『戸惑ひ乱に多小、音量をあげながら疑問を言い放つた

「あんなもの、学園都市が作ろうとするか？俺はあれを『氣まぐれ』で作つたものだからな、ちなみにさつき渡した解毒剤はただの水だ」

「な、何を言つてるんですのー？じゃあ、あの者はー？」

とんでもない」とさりげと『戸惑ひ乱に今度は白井が戸惑い始めた

「言つただろ、薬だつて一粒で永遠に効く風邪薬があるか？お、もうこんな時間が帰らなきやな、じゃあな、ばいばい」

黒「お、お待ちを、つてもう居ない！」

『アリバイブロック

『脇罪証明』

を使って狂を迎えて学校に行つた乱であった

七月一一日超電磁砲編（後書き）

読んでくださいてありがとうございます。
はあ、疲れた、久しぶりに投稿したからかな?
明日にもう一回投稿するかもしません。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月 | 十日 禁書田録編の回（前書き）

読もうと思つてくれてありがとうございます。

今回はスタイルが登場します。

では本文です。

当麻SIDE

とある学生寮

今俺は狂と乱を連れて家に帰つてゐる、乱は強盗が何とかと書いていたがどうせ落ちは実験さえしていない薬の投下だらうし聞いててもちろんぶんかんぶんだから流し聞きしてこる。

狂は狂で補修を寝て過ごしていたら結構すんでたとか、きっと先生たちが急いで進めたんだらうつな。

「ねえ、糞兄貴、ドラム缶ロボットがなんで人さまの家の前にうじやうじやいるわけ?」

「ん?」

狂の言ううじりたしかに清掃用ドラム型ロボットが三体もいる、もともとこの寮に配備されている清掃用ドラム型ロボットは五体のはずなんだが・・・

「不幸だ・・・」

「なにも“まだ”起きていないぞ?」

まだを強調しやがったよ乱は、でもまだ何も確かめていない誤作動か何かかもな。

「とつあえず確かめてみるか

「あつそ」

うん狂がこうこうのは予想ビーツ

「面倒事に決まつてゐるけどね

乱の言葉は否定できないけど、まあ確かめるか。
確かめた先には、

空腹でぶつ倒れたインデックスがいた。

「…………あー、なんか不幸……だ？」

乱の目つきが変わつていなか?

「どうしたんだ、乱?」

「兄貴、早く救急車を、酷いけがだ、このまま放置すると一時間も持たない」

何を言つてんだ?

「よく見るこの血を……」

そこには白い修道服がインデックスの背中、ほとんど腰の近い辺りが、一線されて傷口から血で赤く染まつていた。

「なー?」

「はあ?」

珍しく狂も声をあげ驚いたが、これは……

「くそつ、くそつ!! 誰にやられたんだよ!!」

「誰がしたかは分からぬがそんなことは後で考えるぞ、とりあえず今ここで応急処置はしておく、早く救急車を呼べ」

ああ、そうだな誰がやったなんて後で考えればいい、今は早く救急車を呼ばなくちゃな。

「ん? 誰がやったか? 僕達『魔術師』だけど?」

「だれだ!?」

思わず怒鳴つてしまつたが怒鳴られた方は

ス「ん？僕は？」スタイル・マグヌス、さつきも言つたけど・・・魔

術師さ

「ノーマル

質問に普通に答えた。

「へえー、じゃあ君達が私達の家の前に死体寸前の物体を置いてくれたんだー、さすがに私でもそれは、さすがにちょっと不愉快かな」

「な！」

狂が顔の表情を、それは家族にしか解らないわずかな変化だったが狂がわずかとはいえ怒りで顔の表情を変えた。それに俺はかなり驚いた・・・

SIDE OUT

スタイル SIDE

ビクつ！！！

な！？僕が睨まれただけで、凄まれただけで、後ろに下がつただと！？

こんな平和ボケした、こんな信教信が薄い日本で！？

それに・・・

何なんだ、あいつは？

僕はいろいろな国でいろいろな奴とあつてきたが、あいつはそのどちらでもない。

後ろで応急処置をしている奴は奴で異質だけど似たような奴とはいからあつてきた、だが今僕をにらんだ奴は本質からして何もかもがどの誰でもない。

それこそ、主人公ヒロイチでもなければ登場人物モブキャラでもない、どのカテゴリに
も当たはまらない。

それでも、それでも、僕のやる事は変わらない。

「Fortis931!」

SIDEOFF

乱SIDE

Fortis、日本語では強者と言つたところか。
だがなぜ、いきなりラテン語なんか言いだしたんだ？

「炎よ（Kenzan）」

なにを？

あ？なんで、炎が湧いてでてあんなふうに集まるんだ？

「・巨人に苦痛の贈り物を（PurisanzNaupiNGebo）

炎剣か？あれは、ふう、なんだ、あんなものでは狂を傷つける事は
おろか、兄貴にさえ無理だね。
あれが異能の力である限り。

「兄貴！そいつは見るからに異能の力だ！右手で！幻想殺しで！触
れ！――」

SIDEOUT

七月一十日禁書田録編その四（後書き）

次の話に持ち越します。

次の投稿は今週の金曜日になると思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

SHDEOFF

「うー？」

当麻は乱に言われるがままに右手を、『幻想殺し』を使つた、そして炎剣は弾け飛んだ。

「なつー? うう言つ事だ! ? その炎剣は摂氏三〇〇〇度、人肉は摂氏一〇〇〇度以上の高熱になると『焼ける』前に『溶ける』はずだ! ?」

そう、スタイルが言つてゐる事は正しい、たしかにあれほどの高熱ともなれば『焼ける』前に『溶ける』はずだ、誤算があるとすれば、それは

「兄貴の右腕には『幻想殺し』イマジンブレイカー』て言つ異能の力ならば、超能力だろうと、魔術だろうと、神様の奇跡だろうと、打ち消せるんだ」

乱の淡々とした、嘘を言つているとは思えない説明にスタイルは絶句した。

「おー、糞兄貴、どうでもいいからそこをだけ、あいつを少し痛めつける」

「お前はこいつを手伝ってくれ」

「はーい」

狂の突然の変わつよつにスタイルは呆然とし、当麻はあきれた。

「ちつ（ぢつも空氣がかき乱されるな、それこそつまきの説明が本當だとすれば・・・）」

スタイルは舌打ちをし何かを考え、当麻は殴りかかるために駆けだした、理由は二つ。一つは乱が集中して手術するため（応急処置とは言っていたがあのレベルだともう手術に入ってしまう）もう一つはスタイルをあの残忍な二人の餌食にしないため。

「 世界を構築する五代元素の一つ（MTWOTFFTO）、偉大なる始まりの炎よ（HIGOIIIOF）。」

当麻はもうすぐそこまで近づいていた。

「 それは生命を育む恵みの光にして（HIBOL）、邪悪を罰する裁きの光なり（AIIIAOF）。

それは穏やかな幸福を満たすと同時（HIMH）、冷たき闇を滅する凍える不幸なり（AIIIBOD）。

その名は炎（HINF）、その役は剣（HIMS）。

顯現せよ（HCR）、我が身を食らいて力と為せ（MMGBP）ツ！」

轟！という炎が酸素を吸い込むと同時にスタイルの修道服の内側から巨大な炎が飛び出した。

それはただの炎の塊では無かつた。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油の様なドロドロしたモノが『芯』になっている。

それは人間の形をしていた。タンカーが海で事故を起こした時、海鳥が真っ黒な重油でドロドロに汚れたような そんなイメージを植え付けるものが、永遠に燃え続けている。

その名は『魔女狩りの王』。

その意味は『必ず殺す』。

炎の巨人は真っ直ぐに当麻を襲いに行つた。

「邪魔だ」

当麻は右手でそれを振り払い『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}は、相手の切り札は、飛沫となつてそこら辺に飛び散つた。

「・・・、?」

しかし当麻はそれ以上進めなかつた、否、進むのをためらつた。理由はスタイルが笑つていた、声をあげているわけではない、ただそこに、それこそ蟻を潰す残忍な子供の様な笑顔でそこで笑つていた。

「兄貴！後ろだ！！！」

乱にいわれ振り返るとそこには飛沫となつて飛び散つたはずの『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}がそこにいた。

そして腕を、腕にもつた真紅の燃える十字架を振り下ろした。

七月一十日禁書田録編その五（後書き）

どうでしたか？自分で言つのもなんですが全然進んでいない、一体
七月一十日はいつになつたら終わるのやう。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月 | 一〇〇禁書田録編その六（前書き）

新しく小説書をまとめておけばそれも見てください。
では本文です。

S I D E O F F

「なつ！？」

当麻は何とか『魔女狩りの王』の攻撃を右手で触れて防いだ、そう、たしかに右手で、『幻想殺し』で触ったはずなのに防ぐだけにどうまつた。『幻想殺し』は触れた瞬間に異能の力ならば何であろうと消すはずなのにだ・・・

「どうなつてんだよ！？防げてるのは異能の力の証拠なはずだ！なに、なのにどうして、防ぐだけなんだ！？」

「知るか！あと少し、あと少しで止血が終わる、それさえ終われば俺もその魔術師の撃退に回る、それまで待ってくれ」

乱は止血さえ終わればステイルの撃退に向かう、それはステイルにとつては驚異的であつたが、乱の性格を知っている当麻と狂は「拷問する」これがいつもの乱の回答であつた、そして「一人にはいつもと違う回答をした理由がすぐに解つた。

それは、『魔術がなんだかわからない以上拷問をして攻撃の余地を与えるよりは撃退した方が安全だから』というような理由だろう。そう、乱が『安全』という選択肢をとつた、それこそが一人には異常過ぎる理由に思えた・・・

「解つたよ！それまでもつてやるよ！」

強がり、それはこの場にいた、言った本人も気が付いていた。

『魔女狩りの王』の破壊と回復のタイムラグは十分の一秒にも満たない、一瞬でも離せば『魔女狩りの王』によって消し済みになるそう、当麻が思った時

「ルーン」
誰かがしゃべった。

「意識が戻った？おい、しゃべるな・・・いや・・・しゃべり続ける、そして意識を保て、インテックス！」
乱がインテックスの名を呼んだ。

「・・・はい。私はイギリス清教内、第零聖堂区『必要悪の教会』所属の魔道図書館です。正式名称はIndex- Library Forum-Prohibitorumですが、呼び名は禁書目録で結構です」

淡々と自己紹介をする禁書目録は、本当にあのインテックスなのかと思わせるほど機械よりも冷たい声だった。

「先ほどの続きですが、ルーンは『神秘』『秘密』を指示す一四の文字にして、ゲルマン民族により一世紀から使われる魔術言語で、古代言語のルーツとされます」

乱が怪訝な顔になりつつ言った。

「Index-Library-Prohibitorumだと？
あれは廃止されたはずじゃなかつたのか？いやそれ以上にまさかお前、解離性同一障害か？」
この質問に対しても禁書目録は

「最後の質問は解りませんでしたが、最初の質問に対してもお答えできます。結論からいえば私はそれとは別物です。蔵書量は10万3000冊ですし。先ほどの続きですが、『魔女狩りの王』を攻撃しても効果はありません。壁、床、天井。あたりに刻んだ『

ルーンの刻印』を消さない限り、何度も蘇ります』
解説し話の続きをした。

「灰は灰に（Ash To Dust）」

新たな魔術を使おうとするスタイルに対しても、当麻は

（『まだ！この瞬間に！』）

制御の緩くなつた『魔女狩りの王』^{イノケンティ}から手を離し逃げた。それと同時に禁書目録の止血を終えた乱も逃げた。

「塵は塵に（Dust To Dust）」

「吸血殺しの紅十字（Squeamish B

loody Rood）！」

それに気がつかず魔術を駆使した、もし逃げていなければ確実にあとかたもなく消し済みに。そんなことを思わせるほどの莫大な火力をその魔術は持っていた。

七月一十日禁書田録編その六（後書き）

どうでしたか？自分的には結構進んだと思います。
すみません、現実逃避です。進んでないのは気づいています。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月一十日禁書田録編その七（前書き）

復活！！！

今回でスタイル終わらせます！

擬音をめちゃくちゃ使いますがご了承ください。

10／26改稿 スタイル対当麻追加

では本文です！

スタイルSIDE

「ちつ！」

魔術を行使した後に逃げた事に気がついたスタイルは思わず舌打ちをし

「逃げたか・・・だがどこにいるかなんてすぐに解りそうなものを・・・」

冷静に状況を分析しある結論に至った。

「まさか、このマンションから出たのか？」

そう考えるとかなり面倒だ、『魔女狩の王』^{イノケンティウス}は強力だがローンを貼つた所にしか行き来できないという弱点がある。何よりこの警備^{アンチス}員なんか呼ばれたら魔術なんかは下手に使えないしな・・・

「まあ、とりあえずイノケンティウスにはあいつらを自動追尾させてるし、ここから出たら戻つてくるようにしてある。考えるのはそれからにしよう・・・」

妙に長い独り言を言つたなと思ひながらもこいつする事にしようと思つた矢先

ウイーン

エレベーターがこつちに来たかやはりここから逃げたようだな・・・待てよ・・・エレベーター？イノケンティウスがそんなに乗れるはずがない。

じゃあ誰が？・・・

「はあ、めんどくさいだから殺す

敵に回すと面倒な奴がそこにいた。

SIDEOUT

SIDEOFF

「これからどうするんだよー!ー?」

当麻はインデックスを抱きながらこれからのことについて狂と乱に問いました。

「・・・・、解らない^ー^」

「奴を撃退する。でなければ殺す」

聞く相手を間違えた。間違いなく当麻はいつも思って自分の意見を言うとしたがある事を思いついた。

「スプリンクラーを回したらどうだ?」

「あれを消そうってか?だとしたらばかばかしくて落胆するよ」

当麻が思い付いたことを乱に言うがあきれ顔で返された。

言い忘れてたが、今彼らはイノケンティウスから逃げてる最中である。

「違う、ルーンだよ、ルーン。あれを消すんだよ」

「はあ、兄貴、コピー用紙はトイレットペーパーじゃないんだ。そんなに簡単には消えないよ」

紙は水に弱い。幼稚園児でも知っている理屈だがしょせんは幼稚園児の理屈簡単に消されてしまつ。だが当麻は違つた。

「ああ、だがインクはどうだ？あれなら溶けるんじゃないか？」「・・・そうだな、だが警報装置はご丁寧にも一個一個壊されないか？」

「あ、ごめん。暇つぶしに壊していた」

「お前はなんてことをしてくれたんだ？それさえしなければ撃退できたようなものを」
良いじやんいじやんとわめく狂とそれを怒る乱をほつたらかして当麻は続ける。

「そうか・・・だが管理人室はどうだ？あそこは流石に壊していくんだろう？」

「ん？壊しちゃいけないけどどうやって入るの？」

「窓ガラスでも割つて入る。それまで乱は時間稼ぎをしてくれないか？この学生寮を潰さないようになんに頼むぞ？」

「めんどいけど仕方ないかな？」
こつこつして散らばり乱はエレベーターでスタイルのいる方へ向かい、着くなりこつと言つた

「はあ、めんどくさいだから殺す」

内容としてもかなり間違つていてたしかに殺氣のこもつた一言だつた。

「なんだい？君もかよわい女の子を斬りつけたのを怒るのかい？」
ただ、仕事柄殺氣をあてられるのにも慣れているスタイルにはたいした効果はなかつたが次に発した応答はスタイルでさえも言葉をつ

ぐんだ。

「ん? 言いや別に怒つちやいないよだから殺す。そもそもインテックスはかよわくはなかつたけど?だから殺す。」

無茶苦茶だった。なにを言つてゐる? そんな応答だった。そんな中、乱はこう言い放つた。

「ああ、驚いてるんだね俺がこんなに殺す。を連発する事に、なに驚く事じやない。これは『殺人衝動』といつてね、これを発動させると全ての現象が俺には殺人につながるのを」

スタイルは過去に思つた事を訂正した。こいつもまた主人公ヒーローモラキヤラでもなければ脇役でもないと

「俺は別に怒つちやいない、だから殺す。」

「きみが金髪を赤髪に染めている、だから殺す。」

「きみは14歳だ、だから殺す。」

「きみはヘビースモーカーだ、だから殺す。」

「きみはイギリス人だ、だから殺す。」

「何でもない、だから殺す。」

無茶苦茶すぎる、そもそもスタイルは自分が金髪だった事や年齢を言つた覚えはない。なのに彼はそれを言い当て殺人につなげた。どうかしている。こう思つて当然だつたがスタイルはすつぱりとこの感情を切り捨てどうして単体で向かつてきたかを考えた。

(まさか今言つたのは全部ハツタリなのか? だとしたら考えられるのは・・・時間稼ぎか!?)

スタイルの考えはおおむねあつてゐる。乱は確かに『殺人衝動』を持つてゐるが今はオフにしておりハツタリで言つたまでだった、また前記でも書いたがこれはスプリンクラーを発動させるまでの時間稼ぎであつて今発した言葉も時間稼ぎの一つであつた。

（だがどうやって、僕が金髪だった事や14歳だと言つ事が解つたんだ？）

たしかにスタイルはお世辞でも14歳には見えなかつた。何せ180センチはあるかといつほど背の高さであるうえに頬にはバークードの刺青、全身からは香水のにおい、さらに煙草を吸つてゐる。どこの誰がこんなのを14歳といつてあつたのだろうか。

シャ

「時間稼ぎ終了」と、じゃあ後は兄貴に任せて狂と一緒に逃げるかな。じゃあね バイバイ

「つー? ま、待て!」

スプリンクラーが発動したと同時にあっけらかんと7階から飛び降りて逃げる乱にスタイルは戸惑いを隠せずにいたが乱の言った『じやあ後は兄貴に任せて』にすぐに切り替わつたそして

ウイーン

「よう魔術師」

エレベーターで上がつてきた当麻を見てスタイルはこう思つた

（どうして日本人はエレベーターでこつも移動したがる？ いやそんなのはどうでもいいそういういえばこいつは確かにノケンティウスを触つても何ともなかつたな・・・まあ、あの二人を相手にするよりはずいぶんと楽そうだけど・・・）

「てか、乱はどこに行つたんだ？ 狂は狂でインデックス連れてどつか行つたし」

ぼやく当麻にスタイルはこう応答した

「彼は彼でそこから逃げてつたけど？しかしどブリンクラーを発動させるために彼は時間稼ぎをしていたのかい？イノケンティウスは水くらいじやあ消えるはずがないよ」

「ああ、あんたすげーよ実際に壁とかをナイフとかで刻まれてたらなすすべがなかつたよ」

「どう言う事だい？」

なにを言いたい？そんな顔で質問するスタイルに対し当麻は

「あんたは人の家に何をべたべた貼つたんだ？」

「つ！？い、いのけんていいうす、イノケンティウス！！」

なにを言いたいのか理解したスタイルは魔女狩りの王イノケンティウスを呼んだ、

そして

ゴガアアアアアア！！！

その言葉と同時に『魔女狩りの王イノケンティウス』がエレベーターを溶かしててきた

ス「は、ハハハ、きみ凄いよバトルセンスの天才だね。だけど実践が足りないかな、コピー用紙はトイレットペーパーじゃないんだそんなんに簡単には溶けないよ」

勝つた、そんな顔で言い放ち、乱の言つたような事を言つスタイルを当麻は

当「そうだな、だがインクはどうだ」

言い終わると同時に『魔女狩りの王イノケンティウス』を殴り『魔女狩りの王イノケンティウス』は砕け散り再生しなかった

「い、いのけんていうす？イノケンティウス！魔女狩りの王！？」
名を呼ばれても魔女狩りの王はせいぜいがもぞもぞ動くだけだった

当「終わりだ魔術師！」
一秒一秒ごとに魔女狩りの王の断片はボン、ボンと音を立て消えて
いく

「灰は灰に塵は塵に吸血殺しの紅十字！」
しかし魔女狩りの王どころか炎剣さえも出なかつた

そして当麻はスタイルを殴りとばし面倒事になる前に出て行った

七月一十日禁書田録編その七（後書き）

終わった――――七月一十日が終わった――――
文句なら聞きますから感想に書いてもかまいません。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月二十日禁書田録編その八（前書き）

ああ、まだ七月二十日が終わっていなかつた・・・
すみません自分の馬鹿さを痛感しました・・・

では本文です・・・

「あ、おまえは何やつてんだー！？」

夜に大声が響いた、もちろん周りの人はけげんな目で声の無視を見たが、それと話すものに目を奪われた

「ナニって、インデックスを運んでんだよ？」

「じゃあなんで引きずつてんだ!? 亂も何か言つてやれよ! ?」
狂はけが人を引きずつて移動していたのだつた、そして当麻は乱に
何で注意しなかつたんだと怒つたが

「なぜだ？止血も終わっている。止める必要はないだろう？」
乱は一〇〇〇〇歩引いてもずれた事を言い本気で戸惑っていた、それに当麻は頭を抱えインデックスを自分で担いだ

「ん、ん?」これはどこ?たしか私は・・・あ!魔術師は!?みんな大丈夫!?

「大丈夫か？止血は終わつたがまだ安静にしていろ」

「引きずるのは安静なのか？」（怒）

「本物ヤマトヤシカガ」

「あれ？ 血が止まつてない？ たしか……」
「血は止めた。あと悪いがお前の知識を読ませてもらつたぞ」「え！ ？ き、きみ大丈夫？ あれは言つてみれば猛毒だよ！ ？」

「ああ、後悔はしていないがはつきり言つてまだ頭がすきすきするまわりの人間はなにがなんかわからないという顔をしているがそれを放つておいて乱は

「今夜の宿どうする？クレジットは持つているがここにホテルなんてそんなないし……」

初步的な事を言つていた。ちなみに取り出したクレジットはブラックカードで周りの人間は目を丸くしていた。

「おやおやー？上条ちゃん小さい子達連れてどうしたんですかー」

「人が気にしていることを、よくもよくも、しかも何が悲しくてこんな見た目は子供中身は定年退職まじか教師に言われなきやいけどいんだ」

まあ確かに乱は年齢にしたら小さく詳しく述べば、中一だと書つのに小四といつても通じるほど小さいが（小四から三つ単位でしか成長していない）目の前にいる教師は、定年退職まじかだけど小一だと言つても通じるほど小さかった（とゆうか年齢言つても信じられない）

「離せ兄貴！あいつをぼこる！」

「やめろ乱ーおい狂こいつを頼む」

「え？ちよ、乱が上から・・・げふつ」

当麻は乱を狂の所に放り投げ狂はそれを受け止めずに下敷きになり一人とも気絶した

「いえ、寮が燃えちゃって・・・今日泊まるところないんですよ」

「そうでしたかー、毎度おなじみの不幸ですね。うーん、あーそう

です、今日うちに泊まりませんか？スキヤキにする予定ですし、みんなで食べたほうがおいしいですし」

「えー？ 本当ですか！ ありがとうございます」

「つして今日の宿が決まったのであった。続く

続き

とあるボロアパートの一室

「あー、それ俺が育てた肉！」

「そ、うなんだー（もしゃもしゃ

「乱ちやんはお肉食べないんですか？」

「おれは肉は食べない主義だからな。しらたきおいしいな」「がつがつがつ」

当麻と狂はおもに肉ばっか食い、小萌は肉を全く食べない乱を気遣い、乱は肉は食べない主義だと黙つ事を言いながらしらたきを食べ、インデックスは無心に食べ物を喰つていた

「そりなんですかー、いやーありがとうございます。食費出していただいて」

「宿代と思ってくれ、豆腐もうまいな」

どうもこのすき焼きの材料は乱が宿代の変わりに出したもののようにだ。

「いえいえ、まさか高級国産和牛を十人前、高級国産黒毛和豚をまたも十人前、さらに京都産の野菜、さらにさらにマツタケを五本、高級木綿豆腐も買つてもらえるなんてこいつちがお礼をしたいぐらいですよ」

ボロアパートの宿代としては十分すぎる食費だつたが乱は当たり前のようにこれを渡したようだつた

「しかし、本当だつたんですねー」

「な? 言つただろ?」

「そうですねー、まさかこいつら十人前はあらうかといつ肉をペロリと平らげるなんて・・・先生も驚きですよ」

そう、当麻、狂、インデックスは十人前の肉をたつた三人で平らげたのだった。（小萌も少し食べたが半人前行くか行かないかで野菜に移つた）

こつして七月一十日の夜は平和に過ぎて行つた。

七月一十日禁書田録編その八（後書き）

すみません前の話で『終わった』と書きましたがまだ続きます。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

いやほんとお待ちしております。（ついでに皆さんの作ったの異常^{アブノーマル}と過負荷もお待ちしております）

七月十一日（前書き）

七月十一日がよひやく終わりました。
七月十一日何話続くのだらつか・・・

では本文です。

SHDEOFF

とあるボロアパートの一室

「で、この三人は誰なんですか？上条ちゃん」
小萌は当麻に狂、乱、インデックス、の三人が誰なのかを聞いている最中であった。

「・・・三人とも義理の家族です」「まあ。確かに狂と乱は義理の家族なのだが・・・

「・・・変態ちゃんですか？」

「だああ！解つてますよ！実はルール違反！義理はマナー違反！でもこの一人は本当に義理ですかね！」

小萌は狂と乱が義理のだと言う事は信じたようだが次の問題であるインデックスの事に突入し始めようとしたが

「風紀委員に行くけどいいか？」

「あ、そういうえば私もだ。初めてだなー。ねえどうだつた？乱」

狂と乱は風紀委員に行くと言い出し、答えも聞かないで出ていった。

「・・・解りました。スーパーに行つてくるのでそれまでに先生が帰つてくるまでに、何を話すかをちゃんと整理しておいてください。それと」

「それと？」

と先生モードで話す小萌に質問をする当麻

「先生、買い物に夢中になつてると忘れるかもしれません。帰つたらズルしないで上条ちゃんから話してくれなくっちゃダメなんですからねー？」

そう言いながら笑顔で買い物に出ていった。そして部屋にはインデックスと当麻だけが残つてしまつた。

「悪いな、なりふり構つていられないんだろうけど・・・」

「ううん、あれでいいの。あの人は、とゆうかこの街の人は大半がかわっちゃいけない事だから」

と首を軽く振りながら言うインデックス

「きみの義弟さんが読んだ知識は、実はめちゃくちゃ危険なの。大抵の人は目次を見ただけで頭がパンクしてもおかしくないものなんだよ」

「あー、まあ乱は何をしてもいつも、運も技術も才能も関係なく異常な結果しか出さないからな。いまさら驚くような事じやねーや」乱が読んだ知識、魔道書の事だがこれは伏せて言つたがやはり危険なものだと説明するインデックスに対し、当麻は驚くようなことじやないという

「そりなんだ・・・。もうその時点で一種の才能のような氣もするけど・・・」

「いいや。あれはただ異常なだけだ、本人も気持ち悪い結果しか出さないと言つていたしな」

インデックスは何か納得しないとゆうな顔をしながら聞いてくるが、やはり当麻は異常なだけだと言つ

「そんなことよりどうするんだ、これから」
インデックスは魔道書の事をそんなことで済まされたことにつきをさか不満げな顔を浮かべたがすぐに答えた

「うん。 それなんだけどね、らん？が帰つてきてから考えようと思
うの魔術師も昼間にはあまりはでな行動しないだろうしね
インテックスは乱のことを高く評価しており、さらに魔術師は昼間
にはあまり派手には行動しないと言つ

「そうだな。 乱が帰つてきてからにした方がいいよな」

当麻も乱が帰つてきてからの方がいいと賛同し、魔術師の事について
てもたいして知らないためインテックスの言葉を信じた。

七月一十一日水曜日（後書き）

短い！短すぎる！描画云々も多分解りにくいくらい。
不満がある方は感想の悪い点に書いてください。できる限りなおします。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月 | トトロの | (繪畫)

「こんにちは、気が付いたらお気に入り登録が50を越していました！」
これも皆様のおかげです！

では本文です

SHDEOFF

風紀委員会177支部

カタカタ、そんな音を出してパソコンのキーボードをたたく狂。ただ、乱は・・・

「え、えっと。乱君? 大丈夫? そんなに急いで仕事しないでいいんだよ」

「急ぐ? これくらい普通だろ」

乱は脳の構造上、人の演算機能上、不可能な速度で書類をかたづけていた。

「乱はそれぐらいが普通なんだよ。気にしない、気にしない。バカに見えるから」

と乱はそれくらいが普通で気にしてたらバカに見えると言ひ狂

ウイーンと暗証番号が必要な風紀委員会のドアが開き佐天が入ってきた

「ひたにひはー」

「さ、佐天さん。待つてください」

元気に佐天があいさつをしたが誰も返さない

「・・・おい、お前は風紀委員ジャッヂメントなのか?」

「え? いえいえ、私は一般の学生ですよー」

乱が風紀委員ジャッヂメントなのかを聞いたが即答で佐天が違うと言つた

「・・・さつさと、出てけ！」ジャッヂメントは原則風紀委員以外は立ち入り禁止だ

乱がまつとうに理にかなつた訳もいい出てけと言つたが

「え？ どうしてですか？」

佐天は出でいく気がない。少なくとも乱にはそう聞こえ乱は立ち上がり、思いつきり（本人は手加減をしたようだが周りから見たらそう見えた）佐天を蹴りとばした

「！？ げほっ、え？ どう、「」ほっ。どうして？？」

蹴り飛ばされた佐天は何がどうなつてゐるのか解らないと言つがそれに対し乱は

「どうして？ それはお前がそこにいるからだろ？ さつさと捕まれ、犯人者か？」

佐天がそこにいるからだと言い、捕まれ、犯人者、そんな言葉を投げかけ、睡眠薬の入つた静脈注射を投げ佐天は意識をなくした

「な！？」ジャッヂメント佐天さんが何をしたつて言うんですか！ たしかにここは原則的には風紀委員以外は入つてはダメですけど、これは捕まるようなことではありません！」

「ああ、たしかに入るだけはな。だがこいつは出て行けと言つても出て行かなかつた。それに俺は部外者が大つきらいなんだ、そのせいで仕事が遅れた、これは業務執行妨害に値する」

初春はたしかに立ち入り禁止だが捕まるようなことではないと言つが乱は業務執行妨害だと言つたが行き過ぎなことには変わりなかつた。

「それでも、それでもやりすぎです！」

「どじが？俺ならこんな骨折、ものの十秒で治るぞ。狂にいたつてはすぐに無かつたことになるし、兄貴でさえ数時間で治る」やり過ぎだと言つ初春だが、乱は自分の周りで考へてゐるためやり過ぎだと言つ事に首をかしげていた

「……で、でも」

「なにもないなら仕事に戻るぞ」

乱の常識の無さに驚き、何もいえくなつた初春に對して、乱は納得したものとして仕事に戻つていつたが

ウイーンとまたドアが開き、とゆうかクラッシュングを受けて強制的に開いてきた

「黒子ー、ちょっと調べたいものがあるんだけど、ijiのを使わ……せ……て？」

美琴が入つてつきたが横たわつた佐天を見て驚き言葉を濁したが

「またか、さつさと出て行け」

「なんでー！佐天さんがこんなことになつてゐるのよー？それにどうして、どうしてあんたは普通に仕事をしてゐるのよー？」

乱はうるさりしながら言ひ放つたが何か騒ぎ始めた美琴を敵視はじめ

「良いから出ていけ！これが最後の忠告だ……いや出ていかなく

ていい。今すぐ刑務所に行け」

「なつ、どうしてよ！私が何をしたつて言つのよー！」

乱はなぜか美琴に出ていかなくてもいい、そして刑務所に行けと言ひ放つた

「はつ、お前の人間性なんてしょせんは自分が一番かわいいんだ。

だから自分に危険が迫れば、すぐに前話していた、他人を忘れるんだ

「つー？ 良いから質問に答えなさいよ…」

乱は美琴の人間性を激しく非難し、美琴はそのことに反応はしたが無視して質問に答えると電撃を出しながら言い放つた

「罪状は殺人未遂、窃盗、能力の使用、数えていつたらキリがない。それとこれはまだ調べていないが、俺の所属している研究施設に幾度となくハツキングが仕掛けられているんだ。しかも高位能力者の仕業らしいんだな」

とまあ、冗談でもなく本気で言っている。そんな口調で罪状を言つていく乱に対して美琴は

「な、なによ！ たしかに自動販売機からジュースを捕つてるけど、あの自動販売機は万札のんだからいいのよ！」

「もう総額は二万はくだらないぞ」

美琴はとんでもない言い訳をしたが、乱に一掃された

「つー？ でも殺人未遂はしていないわよ！ 能力は使用したけど、あいつには効かないからいいでしょ！」

「効かない？ それだけで能力を使用したのか？ じゃあそいつは能力のサンドバックになれと？ そもそもお前の能力はレベル5だ、それだけで殺人につながる。さっさと捕まれ」

正論、乱の言葉はまさしく正論だつた。

「な、なによーーーーー私は、私は！ レベル5なのよーーいいじゃないそれくらい！」

能力を使いながら無茶苦茶なことを言い出した美琴。その電撃は機材に、物資に、そして乱に当たつた

「お、お姉さま！？何をしてらっしゃるんですの！？」

「そ、そうですよ！？なんで、なんで！」

黒子と初春は美琴を止めようとしたが美琴は

「なによ！私を非難する方が悪いのよ！それに佐天さんにあんなことした奴なのよ！別にいじやない！」

完全におかしいそんなことを言い放ちながらも電撃を放つのをやめたが

「何を言つてるんですの！？」

「そうですよ！？なんで、佐天さんに攻撃したんですか！」

初春の言葉に美琴は首をかしげながらも、もつ一度乱を見たが、そこにはいたのは服が焦げた佐天の姿だった

「え？どうして？私は・・・」

乱に攻撃したはずだそう言いながらも乱を探す美琴

「『『身氣樓』』この能力は相手の自分に向く意識をいじる能力だよ」

美琴たちの後ろにいつの間にかいた乱は、『丁寧』にも今使った能力の説明をした

「ちなみにこれは自分以外を自分に見せる」とも出来るんだぜ」「くつ、クソ！」

説明をし続ける乱に攻撃を仕掛けようとする美琴

「さて問題です。いま、俺は『身氣樓』を使つていてるでしょうか？」

「なつ！？」

能力の説明を終わると、問題を出し、美琴はそのことを考えていかつたのか驚いていた

「どうしたんだい？みんなを攻撃すればそれでいいじゃないか。そうすれば自分の権威は守れるよ」

「う、あ。え？ ど、どれがアイツなの？」

疑心暗鬼それが美琴の心を蝕んでいき、どうどう地にへたり込んだ

「なんだ、レベル5とは言えこんなものか」

「ひ、卑怯者！」

乱は美琴をたいしたことのないことに呆れていたが、誰かが乱を卑怯者と言つた

「卑怯者です！ あなたのやつた事は卑怯です！」

「どうしてだい？ 初春さん」

みな、狂と乱でさえ、初春が行つたことに驚いていた

「どうして？ よくもそんなことが言えますいね！ あなたは人になりますし、自分は闘わず美琴さんを・・・」

言葉が怒りで出なくなつたのか初春は何も言わなくなつたが乱は答えた

「卑怯か・・・あいつのやつた殺人未遂のほぼ100%がうちの兄貴が標的なんだよ。目的は手段を正当化させる、治安のため、能力に対する見解のため、人の命にため、何より家族のために行動した俺が間違っているはずがない！ 誰もアンパンマンがバイキンマンを殴るのを批判しないそれと同じだ」

例えはともかくたしかに乱の行つたとつりだつた、警察は銃を持つものに対抗するため銃を持つそれと同じだ。

「し、しかし・・・」

「じゃあ俺の何が間違っている？ なにも間違っていないだろ」

そういうながら業務に戻つていく乱。初春は何も言う事がなくそれ

でも反論しようとして立ち尽くしながら何かを考えて、黒子は輸送された美琴を追いかけ、そのほかの風紀委員はなにも出来ずにただ仕事を戻つていった。ちなみに狂は『大嘔吐^{オルフィックショット}』で壊されたものを直していた

七月一十一日㈬の一一(後書き)

投稿終わりました。

皆さんの考えた能力は今もお待ちしております。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月十一日水曜日（前書き）

前書き前回の続きです。
睡眠様とマックス様の考えてくださった能力が出てきまや。
では本文です。

SHDEOFF

風紀委員 177 支部

「うーん、終わつたー！」

狂が間の抜けた声で終わつたと言つたが周りの空氣は重苦しかつた

「固法所長、終わりましたー」

「え？ あ、うん。ありがとう」

なぜか所長と付けて固法を呼び、固法は解つたと言つたが

「ねえ、狂ちゃん？ 亂君はいつもあんな感じなの？」

「え？ ああ、そうですよ。でもまあ、今私は機嫌が悪いから、無関係な他人を助けるのもいいかな？」

固法は乱のとつた行動がいつもあんな感じなのかと聞き、狂はそれを固定したが機嫌が悪いため、先ほどからずっと、正しくは午前中からずっとあの横たわっている佐天を助けるかといった。（ちなみに今時間は16時を過ぎて）

「ねえ、乱。知つてる？」

「なんだ狂？」

「人間は普通はね、骨折を直すのに数ヶ月かかるんだよ」

狂は乱に当たり前すぎると言つたが乱の反応は

「・・・そつか、前から不思議に思つていたんだ、何で骨折？」ときで病院に行く奴がいることが

ガチなめんではじめて知つたとゆう顔をする乱に狂を除いた周りの

ジャッチメンツ
風紀委員はこいつは本当に天才なのか?と思つたが次に狂の言ひ言葉に唾然とする

「それから、手術をして腹切つた場合は勝手にはそう治らないからね」

「・・・それでか、たまに手術をした後まわりにいる奴らが泣いて傷を縫合してくさいと言うのはそうゆうことだつたのか」
何を言つてるんだこいつは、どこまで常識がないんだ、と周りにいる奴が驚いていたが乱が次にとつた行動に比べればこんなのは、まだ常識が通じる範囲であった

「ふむ、いさか機嫌が悪かつたとは言えこいつには悪いことをしたな。狂、悪いがこいつの骨折を『五本指の病爪ファイブオーカス』で直してくれないか?」

「オーケー」

狂がオーケーというやいなや、爪が正しくは右手の爪がありえない速度で伸び始め、佐天を引っ搔いた

「う・・・ん。あれ?私は確か・・・」

「さ、佐天さん!気がついたんですね!」

そしたら佐天が目を覚ました事に初春は泣いて喜んだ。驚いたことに怪我も治つていたがそれも初春は喜んだ

「ああ、お前が元凶とはいえ悪かつたな。これだけでは割に合わないだらうからこの能力を貸してやる」
乱は謝罪をしながら指を佐天のおでこにあてた

「このスキルは『実力数学ハンドミラー』と言つてな、その能力は相手の能力と真逆の能力が使える能力なんだ。例えば、どんな風でも起こせる能

力者が相手だつた場合は、お前はどんな風でも止める能力者になるんだ。例えば、どんな電撃も操れる能力者が相手だつた場合は、お前はどんな電撃も乱すことができる能力者になれるんだ。ただし勝ちはそんなに望めない上に、無能力者が相手だつたり、原石が相手だつた場合は、その能力は無力極まりなくなるし能力査定では無能力者扱いになるから気を付けとけ。解つたか？それとお前の能力である空力操作エアロハンドはもうつといたがな

能力の説明をした乱、ただし偽りがあるとすれば、それは原石には無力だと言う事であつた。実はこの能力を貸す際に乱はスキルをいじくり原石の能力には無力という風に改造した。

「え？ あ、えつと・・・ありがとうございます？」
佐天はいまいち状況が解らないようでとりあえず礼を言つておいたようだがたしかに頭の中で何らかの演算があることに気がついたようだ

「ス、スキルを貸す！？君そんなことができるの！？」
固法は周りにいた者たちは驚いた。それもそのはず、スキルを貸すそれはどんな能力者でも不可能なことであつたからだ。
もしスキルを貸す能力者がいたとしてもスキルはそれだけなため、貸すスキルがないため無理なことであつた。
それを乱はさらりと行つたのだった。

「できる。でもまあ、このスキルの本質は引き分けを狙うためのスキルなわけであるから俺には必要がないしな。ああ、初春これには副作用がないから安心しろ」
乱はできるといい、さらにこの能力は必要がないとも言つたあとに

初春が疑わしい目で乱を見ていたため、副作用はないと言った。

それからは佐天がもう来ません、今度来るときは風紀委員シャッチメントになつていますと言いでてい、比較的には普通に過ぎていった。

「ねえ、狂ちゃん、あなたにもさつき乱君が使つていた・・・ミラージュ・」

「『身氣樓』ミラージュブナイフですね、いや全く効きませんよ。だつて私が乱を見違えるなんてありえないじゃないですか」

目をうつとりさせながら効かないと言つ狂に苦笑いを浮かべる固法

「まあ、ぶっちゃけ、これも能力なんですけどね」

「「「能力なんかい！！！」」「」

さらりと種明かしをする狂に周りにいた数人のノリのいい風紀委員シャッチメが突つ込んだ

「この能力の名は『現実主義者』リアリスト私がありえないと思つた能力を無効化させる能力なの。正しくは私には効かなくなるだけね」

狂が説明した能力は、この学園都市ではかなり使える能力ではあるが、

この能力が発揮のはここだけであつた、何せ原石なんて一生に一人で会えるかどうかといった白物でもあつたため、今までこの能力の存在さえ気がつかなかつた。

実際、狂と乱は自分の能力を小分けした総数は知つていても全ての能力を把握しているわけではなく、精々がまだ半分を知つているかどうかといったところであつた。

「まあ、強制力で言えば糞兄貴の『幻想殺し（イマジンブレイカー）』の方が強いみたいだけど、最後に何かわからない能力を愚痴つた狂だが誰も聞いては来なかつた。

なぜなら

「固法、黒子の分も終わらせといたぞ」
乱が自分にお街の仕事も終わらせたとゆうことに皆が驚いたためであつた。

何せ風紀委員の仕事は多忙きわまる、自分の仕事でさえ残業しなければ終わらないほどに多い時でさえあるからだ。

「え？ 乱君、本当に？」

「ああ、これくらいその気になれば一時間で終わるだろ」
乱の言葉に周りにいた者たちはこいつ思った、やつぱこいつ天才だわ
と・・・

解りにくいーと思します。

『現実主義者』は睡眠様からの過負荷です。

『実力数学』はマックス様からの過負荷でしたが少し採用しやすくなつたため異常として使わせていただきました。

これからも異常、過負荷を応募させて頂きます。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

七月十一一田九の因（繪畫也）

よしー戦闘描写なんか嫌いだ！
だから戦闘描写は有りません

では本文です

夜

「はあ」

とため息をついた当麻だったが、彼は今、銭湯に行つてると中だがその理由が狂、乱、インデックスが銭湯つて何?と、インデックスが仕方ないが狂と乱がとつぴょうしもないことを聞いてきたからであつた。（とは言つても風呂に入る手段はこれしか選択がなかつたのだが）

どいつも当麻が学園都市に行つた年に、乱がまた新しい発見をしてその莫大な賞金で山をいくつか買つたら一つは金脈が見つかって、さらに他からは温泉が噴き出して銭湯に行く必要がなかつたようだ

そつこにうしていのうちインデックスが銭湯に向かつて走り出した

「おい、狂。とりあえず追つておけ。銭湯に着いたら電話しろ」
「解つた」

乱が狂にインデックスを追えと言い、それに今日は従つた

「珍しいな。狂があ前以外でこつも世話を焼くなんて」

「冗貴。周りがおかしいことに気がつかないのか?それと乱は当麻におかしいことが気がつかないかと聞き、そして

「おーーそこにいる奴出て来い」

道の先に叫んだ。当麻はあわてて周りに頭を下げたが誰もいなかつた

「いつから気が付いていたんですか？」

そして道の先から突然、女人が出てきた。その格好はTシャツにジーンズの片脚だけを大胆に切ったという、まあ普通の格好ではあったが。二メートルを越そうかという日本刀を握っていた

「最初から。これだけおかしな状況をつくってんだ警戒されてもおかしくはないだろ？」

ただし乱は日本刀なんかは比較にもならないほど危険なものを持っていたため、たいして何も思っていないようだった

「神淨の討魔ですか。それと神淨の蘭ですかいい真名です」

「兄貴は知らんが俺はちげーよ。目的はなんだ？」

なんかこの一人にてるな話きかないところとかと、当麻は悠長なことを思っていたが。今はやばい状況だという事はちゃんと理解していた

「神烈火織」と申します。目的はインデックスの回収です。・・・で

きればもう一つの名は語りたくないのですが

「魔法名の事だな？」

魔術師の名は神烈火織というらしいが、もう一つの名は語りたくはないと言つたが、当麻何のことが解らず首をかしげたが乱はすぐには理解したが、なぜそのことを知っているのかわからない神烈は眉をしかめた

「ああ、一応いっとぐが俺はインデックスの知識を全部読んだからな」

「なつ！？そ、そんなことはあり得ません！あれは私達でさえ一冊読めば廃人とかすようなものなのに」

乱の言葉に驚く神烈

「あはははーいや、驚くほどの事じゃないさ。まあ、インテックスの回収か。それはなぜだ？お前はイギリス清教の者だろ？」

「驚くことです！それになぜ私がイギリス清教の者と？」

「ん？ああ。俺、あの女狐の寝床の科学的な設備を設けた時にお前を見たから」

神烈は自分がイギリス清教の者とばれたことに驚いたがその理由を聞いてさらに驚いた

「質問には答えた。今度は俺の質問に答える」

「・・・解りました。いいでしょう」

そして神烈はインテックスを回収する理由を話した

「完全記憶能力。それが全ての元凶です。彼女は一度見た物を絶対に忘れる事はありません。そして彼女の脳の85%を10万3000冊の魔道書が使っており、残りの15%で私達じょう・・・じん・・・と？」

神烈が説明している途中で乱が笑いだし、こう言い放った

「完全記憶能力ねえ。さて問題です。俺も完全記憶能力者です。さて俺は何歳でしょう？お前はおそらくこう続けようとしたはずだ。

『15%を一年以内に使い果たす』と。じゃあ俺は何歳だ？」

「・・・10歳ですか？」

ぶちっ。そんな音を立て乱がぶち切れた。

「俺は！俺は！14だ――――――！」

「落ちつけ乱！クソ！こんな時は、困った時の幻想殺し

当麻が右手で乱を触ると乱の怒りが少し收まり、こう続けた

「はあ、はあ。まあ、お前の仮説が正しければ、俺はもう死んでな

「いとおかしい」

「あなたが完全記憶能力だという証拠がありません」
神烈は乱の切れよう少し驚いていたが冷静に答えた

「そうだな。じゃあ仕方ないな。さて、第一問です。この携帯は誰につながるでしょうか？」

この問題には神烈も当麻も解らないといつもいつの顔をした

「正解は狂です。さらに問題です。狂は誰と行動しているでしょうか？」

「つー？」

神烈は答えが解つたようで驚いた。否。あせつた

「正解はインデックスです。そして、最終問題です。俺は狂に何を頼むでしようか？」

「何が、条件ですか？」

神烈はこの答えも解りその答えを回避するための条件を聞いた

「いや、なに。とりあえずは俺の話を信じるところからかな？」

乱の条件は簡単だったため、神烈はその条件をのんだ。そして乱は説明していくた

まず、科学的にいえばたとえ完全記憶能力だろうと、一年に脳の15%も使うにはありえないといつ事。

「そんなことはありません！現に彼女は1年周期で苦しみ始めます

！」

「それは魔術でどうにもなる話だろ？バケツにコンクリを入れて、バケツに入る水の量を減らすようなものだ。それによれば記憶はいつじゃないんだ。知識をどれだけ教き詰めようが、思い出を圧迫するることはあり得ない」

今になつてその事に気がついた神烈は唇をかみしめ

「大体お前らは、科学的とまでは行かなくとも。ほかの例とかは調べなかつたのか？あいつが初めてなわけだはないと知らなかつたとは言わせないぞ。少なくともほとんどの完全記憶能力者は7歳なんかでは死ない。それどころか常人より長生きしたつていう例まであるんだ」

乱の言葉にますます自分を責めるような顔をする神烈

「まあ、今は銭湯とやらにも入りたいしな。それが終わつたらインデックスを助けるのを助けてもいいぞ？これを受けるかはお前たちの自由だ。教会では無くお前たちのな」

乱の言葉に受けるかどうかを迷う神烈だが

「これはスタイルとも相談しな。大丈夫あいつの記憶を妨げてるものだけを消すから。そして俺らが銭湯に入つてる時間だけ考える時間あげよう」

考える時間は答えを出すには短すぎた。それにあのスタイルが、この申し入れに素直に答えるはずもないと神烈は解つていた。しかし、この申し入れを断れば、永遠にインデックスを救う事が出来ない事も理解していた

「解りました。スタイルとも相談してみます。私個人としては是が非でもこの申し入れは受けたいです」

「結構、結構。じゃあ、あの公園で待ち合わせね」

そうして一人・・・三人は別れていった

「なあ、乱

「なんだ兄貴？」

かなり久しぶりに話した当麻は乱にこいつ質問した

「お前って、どうしていつも口調が激しく変わるんだ？」

「・・・気にするな」

何事もない普通の問答をしながらの二人は銭湯に向かっていった

六四 一十一月の四（後晉文）

ぐ、ぐりゅぐりゅだと思こます。
読みにくかったと思します。
どこをどう直せばいいか解りません。
誰か教えてください。
遠慮なんかしなくていいです。
びしづしつてください。

異常、過負荷はまだまだ応募しています。
誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

六月一十一日水の五（前書き）

昨日こゝろあつて投稿できませんでした。
すみません

では本文です

夜のとある公園

「僕は反対だね」

赤髪神父もとい、スタイル・マグヌスは乱の提案を神烈から聞き、却下した

「しかし、この提案以外で彼女を、インデックスを救う道がありません」

神烈はそれでも乱の提案を実行したいという

「君も見ただろう。彼とその義妹は普通じゃない！何をしでかすか解つたものじゃない！」

「彼に、インデックスを利用する必要はありません！それに利用するのであれば、我々にあの事を教える必要はありません！」

今にも魔術を使つた喧嘩になりそうな喧嘩で言葉を放つ彼らを、不審な目で見る者は、いない

「とにかく僕は反対だからね。それじゃあ、今まで僕達がしてきたことは、何だつたんだか解らなくなる」

ギリッ、と歯ぎしりをして言い放つスタイル

「今までしてきたことと、今からすることは関係ありません！それにさつき調べてみましたが、たしかに完全記憶能力者が、七歳やそこらで早死にする例はありませんでした。全員が天寿を全うしています

息を半ば切らしながら、眞実と事實をいう神烈

「クソツ！解つていいんだ！彼がインデックスをちゃんと助けることも！何もかも！でも彼女が僕たちと過ごした日々を思い出すことはない！僕達が彼女にやつってきたことが、無くなることはないんだ！」

「ん？後の方は確かに無くならないけど、インデックスが君たちと過ごした日々を思い出すことはできるよ」

スタイルが本音を言い放つた後に、どこからともなく現れたのは乱であった

「なつ！？いつからそこに！？」

「やあ、で決まったのか？まあ聞かなくとも解るけどや」

驚き思わず言葉をあげた神烈と、驚き言葉も出ないスタイルを、ほつとき提案を引き受けるかどうかを聞く乱

「・・・、スタイルいいですね？」

「ああ、僕たちは君の提案を引き受ける」

「そう、まあ、インデックスを縛つてるのは記憶だけじゃないんだろうけども。それに記憶を妨げているのを外したとたんに、何かしらの防護装置が働くけどいいね？」

提案を受け入れた二人に、自分が知ってる事を話す乱

「ほかにどんなものが、彼女を縛つていいんだ！？！」

「スタイル！？」

乱の言葉を聞くと同時に乱の胸倉を掴みかかるスタイル

「どんなのつて。そりゃあ、遠隔操作装置とかが一番有力かな？まあ、それがなかつたらインデックスは、君たちの言つロンドン塔に両手足を斬り落として、一生幽閉になるから、これを無くすのは反

対かな

たんたんと問い合わせに答える乱に一人は、戦慄すら覚えた

「で、どうするの？インデックスの記憶を正常に戻すの？戻さないの？」

そう、言つてきたのは乱では無く、いつの間にかいした狂であつた。そしてその横にはインデックスがいた

「なつ！？インデックス！？なぜここに！？」

またも驚く神烈に対し、スタイルは今にも怒りが爆発しそうな顔になつていた

「ねえ！？記憶を妨げるものって何なの！？私は知りたいんだよ！」「はあ、どうする本人はこう言つてはいるが？俺、個人としては被体験者の感情を優先したいんだが」

インデックスは真実を知りたいといい、乱はインデックスの感情を優先にしたいといい、この言葉に魔術師たちはとうとう折れ、乱の提案を受け入れた

夜 とあるボロアパートの一室

今この部屋の住人である。小萌は銭湯に行つており、この部屋には魔術師が一人と原石が三人という世にも奇妙な構図が出来上がつていた

「まあ、説明はこれで終わりだ」

乱はここにいる全員にインデックスのおくる状況及び、これからすることを説明した

「あの、すみませんが・・・、どうでそんなことを知ったんですか？おそらくそれらはイギリス清教の、いやイギリス国内でも最高機密に分類されるはずのことですよね？」

乱の行つたことに驚く神烈は乱に質問したが、乱はさりげと

「ん？ああ、あの女狐と英國女王を齎した」

犯罪行為を言つたが誰も方法については聞かなかつた

「じゃあ、開始するか。まずは『寝・ろ』」

乱が寝ろといつとインデックスは驚くことに寝た

「おい、兄貴。インデックスの口の中に右腕を突っ込め」

「いや、あの・・・もうちょっと優しい言い方はできないんですか？」

乱は次の指示を当麻に出したが、当麻はもうちょっと優しい言い方をしてくれと言いながら、インデックスの口に右腕を入れた

「つー？」

すると当麻は大きく後ろに跳ね飛ばされ

「警告、第三章第二節。index Librorum
Prohibitorum 禁書目録の『首輪』の自己

再生は不可能、現状、一〇万三〇〇〇冊の『書庫』の保護のため、
侵入者の迎撃を開始しますッ！？」

禁書目録は、現状を確認し終わつたときに、いきなり後ろから乱が現れ人体力学的に、筋肉量的にありえない力で抑えられた

「おい、兄貴早くこいつに触れ」

「お、おう・・・」

すんなり終わることに、ここにいた全員が目を丸くしていた

六四、十一、丑未の五（後書き）

みじーーーー一巻分がやつとかつと終わった！ーーー

ちなみに、これからも続きますよ

解りにくい所があれば報告してください。できる限りなおします

異常、過負荷、心募しています

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

乱の過去（前書き）

一巻分が終わつたんで、乱の過去を書きたいと思います。

では本文です。

上条 亂、この名は学者ならだれでも知っている名前だらう。しかし、乱が孤児であったという事実と、乱といつ名が戸籍上は違うという事実は意外と知られていない。

乱が生まれた家は、じぶん普通の一般家庭であった。別段これといった自慢も無く、普通の人生を歩んできた両親の間に乱は生まれた。

ただ、乱は普通の家庭には重すぎるほどに、異常であった。生後半年には、ほぼすべての日本語を理解し、字も読めていた。

一歳の誕生日を迎えるころには近所の図書館の本を読破し、大学レベルの問題も難なく解いていた。大人たちは最初はこそ、もてはやしたが、すぐに気味悪がつて遠ざけるようになった。

事実、彼の周りでは良く君の悪いことがよくあった。

リモコンを押してもいよいよテレビがつく。

ボールが乱に当たったはずなのに、貫通したかのように直進する。発育が異様にいい。

骨折したはずなのに十秒後には治っている。

挙げていったらキリがないほどに、異常なことがよくあった。

そんな彼を、生みの親は気味の悪い子とした。そして、学園都市の出張所のような病院に彼を連れていく、乱の本質を調べよつとした。

病院の待合室に一人で待たされる乱は、もちろんここがどこなのかも、何のために連れてこられたのかも解っていた。そして、もちろんまともに受けれるつもりはなかつた。

そう思いながら、ふと隣を見てみると女の子がおり、なぜか彼女の周りだけズタズタになつていて。そして、女の子は乱に氣づき、いきなりこう言い放つた。

「全く、大人たちも的外れだよね。人間は無意味に生まれて、無関係に生きて、無価値に死ぬのに」と

乱は当時三歳で隣にいる同じ年ぐらいの女の子にはじめてこう返した。

「気が合つね」と

実際、乱は無意味に生まれ、無関係に生き、無価値に死ぬ。これが人の人生だと思つていた。

乱は能力こそ異常アブノーマルであれ、性格は、心は過負荷マイナスに近かつた。否、過マ負荷イナスだつた。

そうこうしている内に乱の番が来て病室に行くことになつた。

入つた病室には医者が一人おり、質問をしてきて、最後の質問を医者がしようとしたら、乱はそれを遮りこう言つた。

「すみません。僕の症状は異常なじつことにして貰ませんか？ 病院嫌いですし」と

乱が言つたが医者はこれを拒否した。だが乱はこれを予想していたかのように、どこからともなくデータを取り出し、こう続けた。

「じゃあ、ここに原石50人分のデータがあります。これを上げますから僕のことは異常なしにしてください」と

さすがにこれには医者も戸惑つたが、やはり断つた。すると乱はさらにこう続けた。

「さつき、僕がすれ違つた看護婦さん。名字一緒にしたけど、家族

ですか？」

脅し、三歳の子供が言つには信じられない言葉だった。この脅しに医者は質問内容から解つた。乱の異常性、能力性が甘かつたことを痛感し、また実行しかねないと解つたため、ディスクを条件にカルテにこう書いた。

『異常無し』と

それから数ヶ月後、乱には実の妹ができた。乱は妹に面白いものを課したが、家族は誰も彼女が異常だという事には気がつかなかつた。ただ不思議と思っていたのは、乱に物凄くなついていたという事だけであつた。

それから数週間後、乱はある事件がきっかけで実の妹とは別の孤児院に入ることになつた。

その孤児院で病院で出会つた女の子に会い、名前を変え、一緒に上条家に拾われた。

小学一年生になつた乱は、何となく『死延足』^{デッドロッグ}といつ、いわば不死ののような能力を使つたが、たいして面白くも無かつたためすぐやめた。そう、やめたはずなのだが、それ以来全くと言つていいほどに背が伸びなくなつたのだった。

実の妹とは、今でも連絡は取り合つてゐるし、近々上条家に迎え入れる手はずにもなつてゐる。

というのも、乱が学園都市に行く前ぐらいに実の妹の事を言つたら義母が、

「じゃあ、その子も引き取りましょ」と言つたからであつた。

乱の過去（後書き）

最後らへんがいろいろおかしくなつて、いふと思ひます。が、じつは承くだ
さい。

オリジナルの異常、過負荷応募しています。
誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

暗部壊滅（前書き）

急展開です。

レベル5の雑魚度が上がります。

なんてめだかな作品になつてしましました。

では本文です

とある路地裏

「いや、しつかし」
乱が呆れたように愚痴を言つ。

「暗部つて、いつも脆いのかね？レベル5のいる。『スクール』、『アイテム』なら、もう少し歯ごたえがあると思ったのに
彼は今さつき『スクール』と『アイテム』を暇つぶしに潰して、そ
の潰された者たちの目の前で愚痴つていた。

「てめえ、ゼッテー殺してやる」

「ん？まだ喋れたんだ。麦野ちゃん」

麦野沈利、この学園都市のレベル5の一人で序列は、第四位。な
だが、この序列は必ずしも強さを表わすのかと言われば、それは
違う。

これはあくまで研究所が得られる利益から決められており、狂や乱
の能力は全く何がどうなつているのかが解らない能力であつたため、
最底辺の第八位、第九位になつてゐるのであつた。

「ああ、俺も麦野に賛成だ」

「ああ。君もか、垣根君」

垣根提督 麦野と同じく、この学園都市のレベル5で、序列は第二位

「あははは！……襲撃するつて、俺はちゃんと予告したぜ。それな
のに君たちはこのままだ！どうやって俺を殺すのかな？罠にはめる

？戦力を増強する？六枚羽を使う？なにするの？楽しみだなあ
そつ、乱は確かに予告をした上で襲撃をした。それでも、この二つ
の組織は乱にかすり傷どけろか触れることすらできなかつた。

「テメえ！黙つて聞いてりやいい氣になりやがつて……ぶち殺さ
れてえか……！」

麦野がブチ切れたようで怒鳴つたら、乱は

「え？ いやだよ。つーか、暗部つてホントに脆いね。いやね、この
前『ブロック』『メンバー』『獵犬部隊^{ハウンドドッグ}』を潰したんだよ。」

「「なつ……!?」」

乱が潰したと言つたのは、暗部の主要な部隊名であった。そしてた
しかに先日から連絡が途絶えたと上から聞かされていたのであつた。

「あー、そつだそつだ。この人生のナインド^{ゲーム}を上げてみよう。そした
ら少しは楽しくなるかもしれないぜ」
独り言のように、ブツブツと何かを言つ乱を呆然と見る暗部の者た
ち（意識は残されている）。

「そつと決まつたら麦野ちゃんと垣根君にもついて来てもらわない
とね。学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリーのところに

ね

そう言つやいなや一人をつかんで『脇罪証明^{アリバイブロック}』を使いどこかえ行く
乱。そしてそれを見るしかできなかつた、哀れな、そして愚かな敗
北者達

窓の無いビル

「何の用だ。上条乱」

「ここは俗に窓の無いビルと言われるところであった。そして先ほど
の声の主はアレイスター・クロウリー。この学園都市の統括理事長
であり、また創立者でもあった。

「え？ 暫つぶしだけど？」

それに何の緊張感も無く、人一人を引きずりながら言つ出す。

「……はつきり言おう。私は大変迷惑している。暗部組織はとも
かくレベル5を一人も……よくもやつてくれたな
「んー？ どう邪険為さんな。話は変わるけど『悪平等』^{ノットイコール} って知つて
る？」

迷惑してこのアレイスターを氣にもとめず、話を切り出す
乱。

「……よくは知らないが数年前からある組織で、その総数、目的
は不明。何をするでもなく、ただあるだけの組織だという事だけは
知つている」

自分にもまだ怒りという感情があつたことに気がつきながら言つア
レスター。

「いや、それは『悪平等』^{おれら} であつて、『悪平等』^{ノットイコール} では無いんだよ。

『悪平等』は俺と狂。一人だけさ』

乱の言う、悪平等。これは乱と狂がデュララ！！を見て、その中のカラーギヤングっぽいもを作ろうとして作った、カルト宗教まいなものであった

「・・・ふむ、では『悪平等』はどういうのだ？」

そう、乱はそれを聞いてほしかったのだ。これで人生^{ゲーム}が楽しくなると内心喜ぶ乱

「七万人」

二タあ、と笑いながら言つ乱であつたがアレイスターの反応は鈍い。それもそのはず、なぜなら七万人と言うのは確かに多いように聞こえるが、この学園都市の総数は230万人。たいして驚くほどの数字では無かつたが

「おつと、間違えたぜ。これは創設当時の人数で今は7億人だつたよ。まあ、ぶつちやけ人類の10人に一人は『悪平等』なんだよ」

「！？！」

これにはアレイスターも驚いた。ただ乱が次に言つた言葉にはもつと驚くこととなつた。

「まあ、この中の大半がその自覚も無く。ただ普通に生きてるだけでも、それでも、たしかに『悪平等』なんだけどね」

この言葉の真の意味は、誰に『悪平等』かと聞いても解らないと言う事にあつた。

「何を企んでいる

何か目的が無ければおかしい。レベル5を一人も潰し、大半の者が存在でさえ知らない学園都市の統括理事長、アレイスター・クロウ

リーに会つなんて。否、例え目的があつたとおかしい」とであった。だが乱は即答でこう言つた

「え？ 特にないけど？」

異常、いやそれだけでかたずけるには足りなさすぎた。だが、アレイスターはこう問い合わせ返した。

「・・・ただ、自分の戦力を自慢しに来ただけか？ そうだとしたら今すぐ、消え失せる。それに貴様がどれだけの戦力を持つていようが、私のプランには何の支障もきたさない」

アレイスターのプラン、これは誰もよくは知らない事であった。乱でさえもよくは知らずにいたが

「そつかー、じゃあ、一方通行も『悪平等』だけどいいよね

「な・・・に・・・？」

一方通行この学園都市のレベル5で序列は第一位。そしてアレイスターのプランの重要な鍵でもあった。

「企んではいけないけど、託卵たくらんではいる。とか言ってー、ぶっちゃけ何もかもを、ぐちゃぐちゃに搔き混ぜたいだけなんだけどね」

乱には、善も悪も、毒も薬も、上も下も、レベル0もレベル5も、成功も失敗も、何もかもが一緒に見えているんじゃないか、という懸念でさえもアレイスターは持つてしまつていた。そしてそれは限りなく正解に近かつた。

暗部壊滅（後書き）

うわー！！！！

ビハービハービハービーあと先考えずに書いていたひじひなつてしまつた！！！

まあ、何とかなると思つてこれからも書いていきたいと思つます。

オリジナルの異常、過負荷を応募しています。
誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

講演会？（前書き）

お久しぶりです。
予定より大分遅れました。すみません。
では本文です。

SHDEOFF

「うーん。ねえ、ここって名門校だよね？」

質問をした、少女のよつた姿をしていて、彼は上条 乱。男子である。

「は、はい・・・」

そして、自信無下げに答えたのは、とある学校の理事長だった。

「いや、まいったよ。学園都市でも五本の指に入る常盤台中学が、俺一人にトランプゲームで、いい勝負をしているのは、たった一人だけだなんて」

「うーん。そう言わるとオ。言つ事が無いんだけどオ」

そう、彼はとある事情で常盤台中学で、講演会をしていたのだが、途中からトランプゲームをしだし名門校ほぼ全員を打ち負かしたのであつた。

そして今闘つているのは、食蜂操祈。この学園都市の第五位であり、
能力は心理掌握メンタルアウトである少女であつた。

「まあ。君はかなりやるね。今はほぼ同点だよ」
彼らが今やつているゲームは、完全神経衰弱バーフェクトメラノコイ。

ルールは、

？使用するのは2組106枚（＝ジョーカーが2枚入っている）のトランプ

？数字だけでなくマークも揃えなければならぬ

？揃えたカードの『数字』を得点として合計点を競う。ただし『A』は14点として競う。

すなわち総ポイント416点の奪い合いである。

?完全ターン制。ペアの成否に関わらずめぐれるのは1ターン2枚のみ。（＝通常の神経衰弱のようなペア成立によるずつと俺のターン！はなし）

?ジョーカーの扱いについて

- (1) ジョーカーを引いた場合は場のカードを並べ直す。
- (2) 一度めくられたジョーカーは場からのける。
- (3) ただしジョーカーをペアで揃えた場合はプレイヤー同士の得点がシャツフルされる。

?能力の使用は禁止。

といったものであつたが、この一人はばれないように能力をばかすか使つていたり、カードの位置をすり返したりするなど、基本ばれなきやオーケーと言つた感じでやつていた。

「ううん。不毛ねえ。もうやめるう？」

「・・・確かに不毛だな。もうやめるか」

さすがに一人は不毛だと思ったのか、これをやめたが・・・

「さあ、負け犬ども。罰ゲームでエクレア20個早食いにチャレンジだ。」

「私も手伝うわあ」

悪魔のような笑みを、浮かべる一人に女子中学生達は戦慄を覚えた。（力口リー面でも）

「さて、講演会を再開するか」

悪魔の罰ゲームを終えた女子中学生をそつちの内で講演会を続けようとする乱。（もちろん罰ゲームの拒否権は彼女たちには無く、二

人の洗脳関連の能力で操られていたためゆつくり食べることも許されなかつた）

「まず、このノーマライズリキッドだが、まあ。人体実験をするのが一番わかりやすいな」

そう言いながら、手頃な中学生に注射した。

「ハツ！ 痛い！ ？」
助けて誰か！ ？

すると例によつて苦しみだしたが誰も助けられなかつた。

現田一
君方

助けて」とは「少しの変わりにモルモッコになるんだな?」と、信頼も何もない言葉を言つたからであつた。

「あ、あの！？乱先生！？生徒に何を！？」

勇気ある教師の一人が聞いてきたが、舌は

ヨツク死さえなればあとで勝手に効果は消える。能力者の一人や
一人消えた所で何もないがな」

何の悪ひれも無く
答えた。

「じゃあ、次にこの、超弾道弾だが、」のよひに指で弾くと、
スーパー・ボル

そう言いながら、もう次の物に入つていつた。

せなみに
この講演会は何か主題に謳も何かに觸ひなかつた

講演会も終わり、乱は自分といい勝負をした、食蜂操祈とメアドを交換し帰ろうとしていたが

「お待ちください！」

「なんだ？白井」

ジャッジメント
風紀委員である白井黒子が呼びとめた。

「お姉さまは？お姉さまゼリードすの！？」

「刑務所。それからどつかの研究所で、モルモットでもやつているだ
わ。それがどうした?」

御坂美琴。乱と闘い惨敗し、殺人未遂などで、刑務所に連れて行かれた犯罪者である。

「殺人未遂を良くするやつがかかる？」

怒りにまかせ、と言つたことで怒鳴つまくる黒子。

「はあ、いっちの方が不毛だな。いつそ、あいつの身柄をプロデュ

アリバイブロック そう言いながら、
府罪証明で帰宅する。

「逃げないでくださいいまし……！お姉さまを返してくださいいまし

怒り任せにどこに行つたかもわからない、乱を探しにテレビポートを
しようとする黒子だが・・・

「ほう。廊下で怒鳴るとは・・・。先ほどの方は乱先生か・・・。黒子、処罰は覚悟しているな?」

寮官に見つかり、処罰を受ける羽目になつたのであつた。

講演会？（後書き）

うーん。駄文だ！！！

久しぶりに書いたのがこつも駄文だとは・・・
次の話では、吸血殺し編に入りたいと思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。
異常、過負荷も応募しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9635w/>

とある異常な義弟と過負荷な義妹

2011年12月5日22時46分発行